異端の伝説

望月　桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
異端の伝説

【Ｎコード】
Ｎ２６８８Ｕ

【作者名】
望月　桜

【あらすじ】
――何かが足りない。そう、少年ルイスは、満たされていても寂しさを感じていた。そんな折、家庭教師として現れたのは妖しい雰囲気を持つ美貌の青年で……？　彼の登場で日常が壊されていく！？
魔族と人の交わらない正義と本能。アンチヒロイックサーガ、異世界ファンタジーここに開幕！
――遥かなる時を越えて、彼が求めたのは、たったひとつの「真実」。

1．魔の森

村の東の森には魔物が住んでいる。恐ろしい魔物が、無用心にも森に足を踏み入れた人間を食らうのだ。数十年前、無謀にも度胸試しのために足を踏み入れた青年はけして返らず、森のはずれで左足が一本、見つかったらしい。

いや、住んでいるのは魔物ではない。魔族だ。醜い魔族だ。魔族は、あまりにも醜く、己が姿を見たものを八つ裂きにして殺すのだ。己の醜さに絶望し、日の光と人目を何よりも恐れる、おぞましい魔族があそこに住んでいるのだ。

そうではない。あそこに巣くうは死霊だ。無念のままに死んだ霊が、己の世界に人を引き込もうと、待ち構えているのだ。

東の森には「リファーズの森」という正式名称がある。しかし、誰もその名前で東の森を呼ぶことはない。「魔の森」。そう呼ばれるのだ。魔の森には、様々な逸話があった。何が正しいのか、間違っているのか。

様々な逸話には、しかしひとつの共通点があった。「魔の森には恐ろしい存在がいるから、森にはけして入ってはいけない」というものだ。

ぼんやりと自室の窓から魔の森を眺めている少年、ルイス・カルヴァートも、村の人間としてその警告を聞きながら育っていた。

四肢がばらばらになって発見された人がいると聞かされれば素直に恐ろしいと思うし、例えようもないほどに醜い魔族がいるのだと

聞けば、気味が悪い。

だが、森を見つめる琥珀色の瞳には恐怖も嫌悪も無かった。

ルイスには、何かの間違いに思えるのだ。

森というものは、薄暗い。密集する木々が、太陽の光をさえぎってしまい、昼間でもほの暗くなってしまうのだ。確かに野生の獣はいるだろうから、その点では危険かもしれないが、ルイスの瞳には、森が忌まわしいものに思えなかったのだ。

こんもりとした森の緑は、優しい色で目を楽しませてくれる。森を見つめていれば、ひと口で「緑」と言っても様々な色合いがあるのだということが分かる。様々な樹木が密集しているからこそ、そこに自然の妙ともいえるほどの、美しいグラデーションが出来るのだ。

こんなに美しい森が、本当に忌まわしいものなのだろうか。逸話の中で出てくる「犠牲者」とは、森の獣にやられた者ではないのか。森の中の薄暗さが、人々の畏怖を誘ってしまうだけで、あの森が邪悪なものであるなんてことはないのではないのか。

――村人の誰に言っても変わり者扱いされる事実だが、ルイスはあの森が嫌いではなかった。

とはいえ、中に入ったことがあるわけではない。昔は、ルイスはあの森がとても魅力的な冒険の場に思えて、あの森に行きたがったことがある。しかし、そのたびに、両親は血相を変えて、それを止めさせようとするのだ。

両親に心配をかけてまで、行けるわけがないではないか。魔物がいなかったとしても、野生の獣は確実にいるということぐらいは幼心に理解していたし、たとえルイスが直感的に魔の森を忌まわしく思わなかったとしても、周りの大人が全員、魔の森は邪悪なのだと力説すれば、そうなのかとも思う。

ルイスの両親は、いわゆるブルジョワ階級の人間で、教養もあるのだが、他の村人たちと同様、魔の森の逸話を信じ込んでいるようだった。

ただ、おとなしく納得したような胸のうちで、ルイスの心の中には、どこかで、正しい答えを知っていながら周りに合わせなければならなかったかのような、釈然としない思いを引きずっていた。

しかし、ことさらに魔の森に惹かれるのは、周りの大人に反発したい子供じみた反抗心なのかもしれない。そう思えば、少しだけ苦笑がにじむ。

ルイスには、自分は少しだけ日常に飽いているのかもしれないと思う瞬間があった。

ルイスは恵まれている。両親は、村一番の富豪である。村の同じ年頃の少年が、親の畑仕事を手伝っている間、ルイスは教師に勉強を教えてもらっている。村の人間が、混ぜ物だらけのまずい紅茶を飲んでいる時、ルイスは最高級の紅茶を口にしている。村の人間が、固いベッドの中で眠っている時に、ルイスは柔らかなベッドで肌触りのいいシーツに包まれている。

勉学でも、教育を受けているからというだけでない聡明さがルイスにはあった。ルイスは努力家ではある。だが、その努力をそれ以

上の結果につなげることの出来る思考力と発想力は、まさしく才能と呼ぶべきであろう。

そして、目を見張るというほどではないが、見た目もそれなりに整っていた。瞳は淡く黄色味の強い茶色であり、よく琥珀に例えられる色だ。そして、髪の色は黒。ルイスの住んでいるルスカ王国では、黒髪は珍しいものとして重宝される。ましてや、ルイスの黒髪はつやつやと美しい。目の形が多少きついきらいはあったが、人懐っこく微笑むと、それは綺麗に相殺された。

素晴らしい両親に恵まれ、何不自由なく育ち、生まれもった才能にも容姿にも大して不満はない。そんな自分が恵まれていることは、ルイスは十二分に承知していた。

だが、それでも……飽いているのだ。

心のどこかで、何かが違うような気がする。この日常には何かが足りないと、心がわめいている。いや、「足りない」というよりは、「欠落している」。当然あるべきものが、何かないという漠然とした気持ち。

そして、ルイスが、何が足りないのかとその根源を自分の中に探してみると、それは、寂しさ、だった。満たされているはずなのに、どこか寂しいのだ。

しかし、それこそ馬鹿らしいとルイスは思わざるをえない。ルイスは両親に愛されていた。ルイスの父親であるスタンレー・カルヴァートは、街へ行くたびに土産を欠かさない。そして、ルイスの母親であるポーラ・カルヴァートは、家を切り盛りしながら、ルイスにちゃんと愛情を注いでくれていた。むしろ、ポーラは少しばかり

過保護にすぎるぐらいだ。

ただ、昔泥だらけになりながら遊んでいた少年たちがよそよそしくなったのは、少しだけ寂しい事実だったのかもしれなかったが。少しずつ世の中のことが分かってくるにつれ、幼友達は少しずつルイスと距離を置くようになった。彼らの母親が、農閑期の小遣い稼ぎとして、カルヴァート家に奉公するのだ。そして、ルイスに敬語を使うのだ。そんな現実を知るにつれ、距離が生まれないわけがない。疎まれたわけではないが、前は遠慮なく殴り合いの喧嘩をしていた相手に、敬語を使われるのは、ルイスにとって嬉しいことではなかった。

とはいえ、それだけの事実を不幸だとするわけにもいかなかった。仕方のないこととして理解しなければならない。それに、ルイスは11歳になったら、学校に入学をする。全寮制の学校で同じ年頃の子供と一緒に生活をするのは、不安もあるが、それ以上に楽しみでもあった。気の合う友達が出来るだろうか。友人たちと過ごす学園生活に思いをはせれば、少しの寂しさは消えてしまうはずだった。

そして、屋敷の使用人たちとは、対等な立場というわけにはいかなかったが、そこには確かに温かな絆は存在する。老執事のフィリップは、ルイスが疲かれていると、リラックス効果のあるカモミールを入れてくれる。

ルイスは、客観的に自分がどうして寂しいなどと思わなければならないのか分からない。それでも。漠然とした寂しさは、確かに存在していた。

しかし、ルイスは首を振る。

（…俺もまだまだ子供だから…）

これは、おそらく根拠のない思い込みであるとも、ルイスは思っていた。

幸せを約束してくれるという花を探しに冒険に出て、様々な冒険の果てに、たどり着いたのは自分の家であったという御伽噺を思い出す。

己に富や才能などが欠落していると思った人間は、それを求める。そして、全て恵まれている人間は、今度は刺激だとか漠然模糊とした何かを求めだす。それこそが子供じみていると一笑に付して、ルイスは先ほどから休憩していた読書に取り掛かる。

歴史書の暗記は、家庭教師のマライア・スチュアートに出された課題だ。マライアは、2日前から実家に戻っているが、帰ってきたときこの中から問題を出すからと課題を出された。普段は優しいが、勉学になると別人のように厳しくなる人なので、気を抜けないとルイスは本に目を落としていた。

そんな中、部屋の扉がノックされた。

「ルイス様、お勉強中のところ、申し訳ありません。旦那様がお呼びです」

それは、屋敷のメイドの声だった。

「父さんが？　分かった、今行く」

ルイスは、そう言って、読みかけの本を書き物机の上に置くと、

椅子から立ち上がった。

「父上。ルイスです。入りますね」

ルイスはそう言って応接間に入る。

わざわざ他人行儀な言い方をするのは、他に客人がいるようだからだ。相手が誰だか、用事を言いつけられたメイドも知らないようだったが、礼儀を欠くわけにはいかないだろう。

応接間には、飾り棚が置かれ、東の国で作られるという藍色があざやかな陶器の壷が置かれていて、十分に賓客をもてなせる内装になっている。部屋の中央にはテーブルと、その周りに配置されたすわり心地のいい椅子。そこに、2人の人間が座っていた。

ひとりは、ルイスの父親であるスタンレーだ。スタンレーは、四角い輪郭に短く切った茶色の短髪と同じ色の瞳を持つ、逞しい体躯をした壮年の男であった。美男子といった様子ではないが、やり手の経営者らしく、どっしりとした体格からはそれなりの自信と貫禄が感じられる。

そしていまひとりは、見知らぬ銀髪の青年であった。

「…ご用件とはなん……」

『なんですか』と。そう問おうとした先は続かなかった。

父がもてなしている「客人」の美貌に、ルイスは一瞬目を奪われたのだ。

高価なガラスを惜しみなく使った窓からふんだんに降り注ぐ日の光をあびて輝くのは美しい銀色の髪。正面からではどれぐらいの長さなのかは分からないが、真っ直ぐなそれを伸ばして後ろで結んでいるようだった。肌は透き通るように白く、長いまつげの間で揺れる瞳はルイスと同じく、琥珀のような色だった。しかし、似たような色彩でも、随分イメージが違う。黒髪の中で明るく光るルイスの瞳に比べ、彼の瞳はどこか神秘的な色を帯びて静かに瞬いている。

信じられないのは、これほどの美貌を持つ人間が、男性である事実だった。いや、けして彼が女性的なわけではない。体格は適度にしっかりしていたし、座っているのではっきりとは分からないが、平均よりもかなり高身長なはずだ。

だが、彼の容姿を簡単に表すのなら、「美貌」とか「秀麗」と言った言葉しか似合わないような気がしたのだった。「ハンサム」なんて言葉で表すには、彼の容姿は美しすぎた。

そして、彼の美貌はどこか硬質だった。顔立ちが整いすぎて、どこか無機物的な印象を抱かせる。その無機質な美貌が、ルイスを見つめて、花がほころぶように微笑む。それが、彼の第一印象を打ち破った。硬質な印象は、柔らかで優しそうな印象へと変ずる。

しかし、その瞬間、ルイスは何故だかぞっとした。彼の微笑みが、何故か恐ろしかった。

「ルイス？　どうかしたのか？」

突っ立ったままのルイスに、スタンレーは心配の声を上げる。

それに、ルイスは一気に現実に引き戻されたような気分になる。

スタンレーは心配そうにルイスを見つめ、男は微笑んだまま首をかしげている。

「あ…。すみません。父上。そちらの方は…？」

ルイスが非礼をわびてから、改めて男を見た。確かに、容姿は整っている。おそらく、今まで見た誰よりも。だが、それだけで気味が悪いと思うなんて、自分は随分失礼だと思ったのだ。

「ああ…。ルイス、お前の臨時教師となるアルバート・ヘストン先生だ。先生、こちらがルイスです」

スタンレーに促され、ヘストンと呼ばれた男はルイスに微笑みかけた。

「始めまして。ルイス君」

「…あ。始めまして、ルイス・カルヴァートです……。あの…父上……スチュアート先生は…」

すぐに帰ることが出来るはずではないかと視線を向けると、スタンレーは苦笑する。

「――それが、スチュアート先生の実家の母親の容態が思いのほか思わしくないとのことで…。介護のためにしばらく暇を出すことになったのだ。スチュアート先生はその間の代理として、ヘストン先

生を紹介してくださったのだよ」

ルイスは、その言葉にとりあえず安堵の息を漏らす。

マライアの母親の容態が思わしくないというのはいい知らせではないが、何らかの理由で止めたわけではないというのは、ルイスにとって安心する事実だった。厳しい人ではあったが、ルイスはマライアを慕っていたのだ。

「…母親がですか…それは心配ですね……。それでもわざわざ僕の心配をしてくれるなんて、スチュアート先生は相変わらず気遣いの出来る人ですね。それに、ヘストン先生も、突然のことでお困りになったでしょう、ありがとうございます」

ルイスは、礼儀正しくそう言った。

そして、疑問に思っていた。アルバートという青年と家庭教師という立場は全く似つかわしくないものに思えたのだった。

まず、ルスカ王国では家庭教師は、子供の世話役も務めるため女性であることが多い。中流階級出身の独身女性が身を立てるために家庭教師として働くことが多いのだ。そんな常識を持っているルイスから見て、男性家庭教師というものは珍しいとルイスは思った。

だが、一時的なものだからかもしれないとルイスは思った。ルイスは来年、学校の入学試験を受けなければならない。その時少しでも困らないようにと、マライアは苦心してくれていた。それなのに、この時期に空白が生まれるのは好ましくないと思ったのかもしれなかった。そして、知人のアルバートに無理を言ったのかもしれない。

だが、マライアとアルバートは一体どのような知り合いなのだろうとルイスは思った。マライアは、３０を少し超えた、少しふくよかな女性だ。美しいというわけではなかったが、笑顔が魅力的だった。どこか子供のようなあどけなさすら感じる笑顔は、ふっくらとした頬に現れるえくぼのせいだろうか。

しかし、マライアの魅力は笑顔だけでなく、彼女がとても勤勉であることだ。中流階級の教養のある女性はたくさんいるだろう。だが、マライアほど歴史や経済に熟知している女性は珍しいに違いない。カルヴァート家で共有している書架は図書室と呼ぶのにはおこがましいが、それでも内輪ではこっそりと図書室と呼んでいる。その図書室を最も熱心に利用するひとりがマライアであった。

勉強では厳しい女性であったが、それはルイスを思ってのことであるとルイスは理解している。だからこそ、ルイスはマライアを慕っていた。勤勉家であることも尊敬できる条件だ。独身を貫き、自らの足で立っていようとする姿勢は好ましかった。

しかし、そんなマライアと目の前のアルバートがルイスの中では繋がらない。親戚だろうかと思ったが、容貌にあまりに共通点がなさ過ぎるのだ。

「スチュアートさんは、とても素晴らしい教師であったと聞いております。その代わりが務められるのか緊張しておりますが、どうぞよろしくお願いします」

ルイスの困惑をよそに、アルバートは緊張などどの口で言うのかというほどに落ち着いた声音でそういい、静かに頭を下げた。

1．魔の森（後書き）

導入編となります。

2．教師と秘密

「ヘストン先生は、このあたりは始めてですか？」

ルイスの部屋で2人きりになった後、ルイスは間を持たせるためにそう質問した。

「そうですね。…エインマハのあたりとは、また勝手が違って戸惑っています」

ルイスはアルバートの答えに納得して頷いた。

エインマハは、ルスカ王国の首都だ。ルイスも何度か行ったことがあるが、静かな田舎になれた身では、ひたすらにその人の数と家々の密集っぷりに驚くばかりだった。国王の住居であるのセントマルク宮殿など、その壮麗さに唖然とする他ない。

逆にその光景になれた人間からすれば、この田舎の何もなさに驚くのだろう。

たしかに、アルバートには鄙の地より都会のほうが似合っていた。所作のひとつひとつが洗礼されていて、それを見るにつれ、彼が家庭教師を務めているという違和感がルイスの中で膨らんでゆく。

「――先生は都会の方ですか。それならば、何もないところだと思ってらっしゃるでしょうね。正直僕もそう思うのですが…それでも、景観の美しさだけは保障しますよ。僕は思うのですが、東から朝日が昇る時の美しさは、この村でしか見ることのできないものだと確信しています」

ルイスは、そう言う。

ルイスの朝は早いが、茜色に染まった空が黄金に更に色づき、森の果てから太陽が姿を現してくる瞬間が何よりも好きだった。それは、神聖さを思わせるほどに荘厳な時間だった。

「――東といえば、森がありますね。たしかに、あの森が黄金に色づくのは美しいでしょう」

アルバートの同意に、ルイスは少しだけ嬉しくなった。忌まわしいものとあの森を忌避する村人にはあの森がまがまがしいものに見えるようだった。だからこそ、ただ綺麗だという印象を共有できるのは嬉しい。

「…そうなんです。……あ。でも」

「ルイス君？」

言いよどんだルイスに、アルバートは首をかしげる。そうすると、美しい銀糸の髪がさらりと揺れる。先ほど知ったのだが、アルバートの癖ひとつない銀髪は腰に届きそうなほどに長い。それを、真後ろでひとつで束ねているようだった。

「…その……。あの森には、昔から不吉な噂があって。もちろん信憑性があるかは怪しいものですが…。昔からあの森での怪死が多かったのは事実ですから。村人は、あの森には不用意に近づかないようにしています」

ルイスは、不本意ながらそう言った。

折角森を美しいと認めてくれたアルバートにこんなことを吹き込みたくはなかったのだが、アルバートが何も知らずにあの森に近づくことは避けなければならなかった。

「…そういえば、先ほどスタンレー様も仰っていましたね。あの森は『魔の森』と呼ばれていて、邪悪なものがひそんでいるのだと……」

「すでに父がお耳に入れていましたか」

警告を与えていたらしいスタンレーに、ルイスは苦笑する。

「――美しい森なのに…邪悪なものが潜んでいるとは信じられませんね」

だが、ルイスはアルバートの言葉に、少しだけ救われたような気がした。ほんの、少しだけ。

「そういえば、ヘストン先生はスチュアート先生とはどのようなお知り合いなのですか？」

ふと、気になっていたことをルイスは口にする。

「…実は知り合いというほどではないのですが、私が家庭教師の職務を希望していることを知って、紹介状を書いてくださったのですよ。いい方ですね」

アルバートは微笑んでそう言う。

しかし、それにルイスはそれにざわりとする違和感を覚えた。

――どうして、知り合いというほどでもない人間が、家庭教師の職を探していることを知ったというのだろう。仮にアルバートが困っていたとしても、赤の他人が無職で困っているのを見て、紹介状を書くほど、マライアは軽々しい性格ではなかった。

紹介状とは、雇い主に、『この人は信用できる人です』と宣言する保証書のようなものだ。昨日今日会っただけの、身元も知れぬ相手のために書くものではない。

「成り行きではなく、希望してらしたのですか？　どうして…」

気持ちの悪い違和感を抱えたまま、ルイスはそう質問した。

アルバートが女性であったのなら、納得いく答えになったのだろう。中流階級以上の教養ある女性にとって、一般的に女性が職を持つことは恥ずべきものだとされる。だが、女性が「レディ」としての対面を失わずにつくことのできる唯一の職業が「家庭教師」なのだ。だから、何らかの理由で独身を通す女性が、家庭教師としての仕事の口を探すのはさほどおかしなことではない。

そしてだからこそ、一般的に女性がつくべきものとされる家庭教師に、男性であるアルバートがつきたがるというのは、ルイスの常識としておかしなことだった。

「…少し、事情があるので。――ルイス君。貴方の問いに答えたいのはやまやまなのですが」

アルバートは、そう言うと、はかなげに微笑んだ。

改めて、アルバートの美貌を知らしめるような、人の視線をひきつけるような微笑みであった。それに見ほれそうになる自分を叱咤し、ルイスは目をそらすと窓のそとを見た。

「…分かりました。言いたくないのですね。そならば、俺もこれ以上は問いません」

「――すみません」

「いえ。言いたくないことぐらい、誰にでもあると思っていますので…。というよりも、人って、言いたくないことを無理に問い詰められたら…嘘をつくほかないじゃないですか。それが、嫌なので…」

「嘘は、お嫌いですか？」

ルイスは、アルバートの問いに、妙なことを聞くと思った。

「…必要な嘘もあることは分かっています。嘘は必ずしも悪意からのみ生じるわけでもないことも知っています。…それでも、好きか嫌いかと問われれば…嫌いですね。しかし、皆そうではないですか？　嘘をつかれるのは気持ちのいいことではないでしょう。それに、嘘に振り回されて、本当のことが分からなくなるのは、嫌です。それぐらいなら、『言いたくない』と素直に言われるほうが、好ましいと俺は思います。『言いたくない』というのは、ひとつの真実ですから」

ルイスは、そう言った。

「なるほど、心しておきます。私は、貴方には嘘をつきません」

ルイスの言葉に、アルバートはそう言う。

しかし、その言葉にルイスは激しい不愉快さを感じた。『嘘をつかない』という誓約ほどうさんくさいものはないと、本能的に思った。

理性は、アルバートなりに誠意を表そうとしている言葉なのに、悪意に取るべきではないと思うのに、感情が激しく拒否感を抱く。

今、自分がとても大きな嘘をつかれたように感じたからだ。

自分でも驚くほどの怒りが、体中を駆け巡る。体温が一瞬で上がった気がした。

「――ルイス君？」

ルイスの様子を不思議に思ったのか、アルバートは不思議そうにルイスの顔を覗きこんでくる。自らの中の理不尽な怒りを殺そうとしているのに、そのアルバートの無遠慮な行為に、思わずルイスは苛烈な瞳で彼を睨みつけた。

そして、その次の瞬間には、そのことを猛烈に後悔するほどには、ルイスは理性的だった。

「…どうかしましたか？」

しかし、そんなルイスの内面に気づかなかったかのように、アルバートは不思議そうな笑みを浮べたままだった。

「…いえ、すみません。考え事をしていたもので」

あの一瞬の怒気に気づかなかったとは、繊細そうな見掛けに反し、案外鈍いのかとルイスは思って、少し安心した。

そして、ルイスは、そう言いながら、かろうじて微笑んでみることができた。自分がアルバートに感じる憤りは不当なものだと己に言い聞かせながら。

だがしかし、ルイスはわざわざ自分に言い聞かせなければならないことこそ、その憤りが間違いなく存在していることだと、気づいていなかった。あるいは、気づかないふりをした。

「――魔界と呼ばれる地は、人間の世界と重なるように存在しています。…魔界はどこにでもあり、どこにもないとも言えます。一般的に忌避されている地は、魔界へと道が通じている場合が多い…。魔界についての詳細は、人間には、未だ謎が多いのが現状です。ですが、かつての魔界は様々な魔族がそれぞれ小部族を築いていたと言われています。魔族とひとことで言っても、その特徴や発生は様々です。人が魔へと落ちることもあれば、長い年月を生きた獣が変化することもあります。また、かつては信仰の対象であったがゆえに息づいたものが、魔へと転じることもあるようです。しかし、いにしえに、あるひとつの魔族の部族が魔界を統一し、魔界は、統一国家となっている。…これが一般的な魔界についての学説です」

人の世の歴史と、魔界史は切っても切り離せない。人は幾度となく、魔界からの侵攻にさらされてきたのだから。

「…質問をしてもいいですか？」

しかし、腑に落ちないことがあって、ルイスはそう言った。

「なんでしょう」

「最近、魔界からの侵攻が活発になろうとしているのは何故ですか？」

ルイスの言葉に、アルバートは静かに彼を見た。

「なぜ、そう思うのですか…？」

「――魔族がティルの街を狙っていると聞いたからです。ティルは、６０年ほど前まで、鉄壁の守りを誇る地でした。魔族も魔物も寄り付けないと言われるほどの城塞都市。実際に、いかな強大な魔力を持つ魔族といえども、ティルの攻略には苦戦している。――それをなぜわざわざ攻め落とそうとするのだろうというのが最初の疑問でした。俺は…気になったので、ティルについて調べてみました……。そして、歴史書を紐解くと、ティルはかつての聖地であったことが分かったのです。…それも、このルスカ王国の礎としての。この国を守護する聖都なのです。だから、魔族が狙っているのだと理解しました。…街ではなく、この国そのものを落とすために。ですが、俺の仮説が正しいとすると、今度は何故今までティルを狙わなかったのだろうという疑問に当たってしまいます。…そこの逆説として、聖都だからだという答えが出ました。聖都であり城塞都市であるティルは魔族にとってあまりに攻略が難しい。だから、せいぜい人間界の一部を蹂躙したい魔族にとっては、あまりに労力がかかりすぎた。――つまり、今まではどこかに侵攻があったとしても、それは

小さな規模に過ぎなかった。しかし…ティルが狙われたということは…魔界は我々に全面戦争を仕掛けてくるつもりなのではないでしょうか…。それに比例するようにして、こまごまとした魔物がらみの事件なども少なくなっていることも……皆喜んでいますが…俺は不吉に思えてならないのです…。ですが、なぜこんなに魔界のやり方が変わったのでしょうか…。それを考えると……」

アルバートは、ルイスの言葉に息を吐いた。それは、純粋に感嘆のため息であった。しかし、ルイスは、一気に言った自分の仮説が見当はずれであったのかと不安に瞳を揺らす。

「――驚きましたね。…貴方はたしかに聡明だ…」

「間違って…いませんか？」

「ええ。おおむね合っています。――魔界からの侵攻が本格化しそうだ、などということは…。パニックを引き起こす要因として、一般的には伏せられているのですがね。自力でそれに気づかれるとは…」

「…いえ……た、ただ…興味があっただけで…」

謙遜しながら、しかしルイスは、「一般的に伏せられている」ことを、なぜアルバートは承知しているのだろうかと、少しだけ疑問に思った。

「魔界に、興味がおありですか？」

「――はい。重なり合っているのに異なる世界。…すごく、不思議な気がして」

ルイスの言葉に、アルバートは笑っていた。

「な、何がおかしいのですか…！」

馬鹿にされたように感じ、ルイスが顔を真っ赤にさせると、アルバートは苦笑した。

「いえ…ただ、懐かしい気持ちになりまして」

「…懐かしい？」

「――よく似た会話をしたことがあるのですよ、昔に。…人界にある人は魔界に焦がれ、魔界にある魔は人界に焦がれる…。異界に焦がれる……。嗚呼……そういうものやもしれませんね…」

アルバートは、歌うような調べでそう言って少しだけ遠い目をする。かつての何かを、思い出すように。

「ヘストン…せんせ…い？」

異様な雰囲気を、少しだけ怖いと思いながら、ルイスはそう言った。それに、アルバートは微笑んだ。その途端、ぴんと張り詰めた空気が、柔らかなものに変わる。それは、劇的な変化だった。

「――少し休憩をしましょうか。お茶でも入れましょう」

「あ……はい」

白昼夢でも見たかのような心地で、ルイスは生返事を返す。

そんなルイスの様子に気づいているのかいないのか、アルバートは、部屋を出て行くと、ティーセットを携えて戻ってきた。可憐な野いちごの柄が可愛らしいそのティーセットは、スタンレーが気に入って、わざわざヤルヴィ王国から求めたものだ。

「…ありがとうございます」

ルイスはそう言ってから、ティーカップを手に取ると、その良い香りを放っているその紅茶をこくりと飲む。

その瞬間、目を見開いた。いつもの茶葉であるのは分かる。しかし、そのいつもの茶葉が今まで味わったことのないほどにおいしく思えたのだ。上品な味が口いっぱいに広がり、そして次の瞬間には口の中で広がる香りに陶酔する。飲み干した後も、幸せの余韻のように、体は快楽を訴えていた。

「――どうでしょうか。お口にあえばいいのですが」

驚いた顔のままのルイスに、アルバートはそう言って首をかしげる。

「…おいしい……」

それに、ルイスの口から素直な感想が漏れる。

「それは良かったです」

「これ…ヘストン先生…が？」

ルイスは、そう訪ねる。紅茶の味が、入れるものの技量で全く違うのは、承知しているつもりだったが、こうまで劇的に違うものかと驚愕を禁じえない。

「はい。紅茶を入れるのは昔から趣味でしたので、入れさせていただきました」

「そうですか…。とってもおいしいです。何かこつがあるんですか？」

「こつ……ですか。いえ、考えたことがありませんね。ただ…」

「ただ？」

「喜んで欲しい人がいたもので…。ただ、それだけです」

「――喜んで欲しい人…それは、誰ですか？」

ルイスがそう訪ねると、アルバートは、あいまいな笑みを浮かべる。

「その話は、いつか機会がございましたら。…あ、そういえば、うっかりしていましたね。先ほどのルイス君の問いに答えていませんでした」

「あ…」

ルイスは、若干アルバートにはぐらかされたように感じた。やはりアルバートはどこかうさんくさい。言えないことばかりだ。言うのが面倒くさいといった様子にも見えない。何を望んでいるのか、

何のために家庭教師を勤めているのか、未だに分からないのだ。
だが、先ほどの問い…「なぜ魔族の侵攻が今になって活発化しているのか」という問いに対する答えが気になったのも事実だった。
「…実はそれは、学者たちの間でも、まだ分かっていません」
「…え」
ルイスは、アルバートの言葉に拍子抜けしながらそう言った。だが、アルバートの言葉には続きがあった。
「ただ。…魔界の方で、何か大きな変化があったのではないかと…そう、言われていますね。国家の転換を図るほどの、何かが」
そのアルバートの言葉に、ルイスは、何故だかどきりとした。

3．父と母

「――勉強は頑張ってきたの？　ルイス」

そう言って微笑むのは母であるポーラだ。手に持っている剪定ばさみが楽しげに音を立て、余分な枝を切り落としてゆく。

残酷なようだが、美しい薔薇を咲かせるためには、多少の剪定が必要なことをルイスは理解していた。

「うん、頑張ってきた」

ルイスはそう言いながら、ポーラの手伝いをする。

下に落ちた枝木を拾いながら、木に水を与える。カルヴァート家の庭園は、ポーラの数少ない趣味でもある。ルイスの目から見ても、ポーラは花の世話をしている時が一番幸せそうだ。

空は気持ちのいい青空で、庭園にさんさんと日光が降り注ぐ。日の光の下で、庭園はいきいきと輝いていた。暖かな今は、１年の中でも最も花の美しい季節だ。

「そう。良かったわ。新しい先生はどう？　親しくなれて？」

そう言って微笑むポーラはどこか少女めいた雰囲気を持っていた。とても１０歳児をもつようには見えない。少女のまま大人になった女性。それが、ポーラを表現するのにはぴったりだった。

体型がかなり小柄なせいか、しぐさがどこか可愛らしいせいか、

いつまでも「可愛らしい」という形容詞が似合う女性であった。金色の髪はきっちりと結われているが、それですらポーラを歳相応に見せる役には立っていない。

ルイスは、この母親が自慢だった。

今より2、3年前、その時まだ親しく遊んでいた村の友達に、『将来は母のような人と結婚する』と宣言してマザコンだと揶揄されたことは記憶に新しい。

ルイスには、自分の両親が理想の夫婦に見えた。スタンレーが外で必死に働いて家族を守り、ポーラは家の中のことを切り盛りしてスタンレーを支える。ルイスは、珍しいほどに素直に父を尊敬し、母を敬愛している少年だった。

そんなルイスにとって、理想である両親を目指すのは自然なことであった。だが、笑われたのだ。それは、ルイスにとって幼心に傷つくことだった。母親が好きなことはいけないことなのかと、本気で憤った。

しかし、笑ったのとは別の少年が、『でもルイスの母ちゃんぐらい可愛かったら分かる気がするな』と言ってくれた。それが、ルイスにはとても嬉しく、そしてポーラを誇らしいと思った瞬間だった。

ポーラは、絶世の美女というわけではない。造作も、それなりに綺麗ではあるが、十人並みより少し上な程度だ。だが、それでもポーラが人目をひきつけるのは、全体的なバランスがあまりに可憐だからであろう。

華奢で小さな体の上に小作りの顔が乗っている。そして、瞳は小

動物を思わせるそれで、唇も鼻も小作りだった。

そして、ポーラは何よりもルイスを可愛がってくれた。子供の頃、ポーラが行っているガーデニングの作業をルイスが不思議そうに見ていたのが、ルイスが作業を手伝うようになったきっかけだ。

ポーラは、根気強くルイスに色々と教えてくれた。花の種類から、剪定の仕方、肥料の与え方、害虫の駆除のやり方。ルイスが誤って、切るべきでない枝を切り落としても、水を与えすぎて枯れさせてしまっても、ポーラが怒ることはなかった。ただ、優しい口調でどうしてこうなったのかを2人で検討するようにしていた。

ポーラの教え方は、ともすれば甘くなりがちであったが、自分で反省することのできる、努力家のルイスとの相性は良かった。

そのおかげで、すっかり慣れた様子でルイスは手入れを手伝いながら、ポーラへの質問へ答える。

「――いい先生だと思う。相当に博識だし、教え方も上手だしね」

その評価は嘘ではなかった。だが、ルイスは、未だにアルバートが好きになれなかった。理由は、分からない。

アルバートは客観的に見て素晴らしいとルイスも認められる。博識だが、ひけらかすようなところはない。性格は控えめで、誰にでも丁寧に接する。そして、授業の休憩として入れてくれる紅茶はおいしい。

それは認められるのに、どうしてだかルイスはアルバートが好きになれないのだ。

理屈ではない感情の部分が、アルバートを拒否している。なんというか、完璧すぎてうさんくさい、というのが最もあっている気がする。なぜ家庭教師になりたかったのかも、結局分からないままだ。それを言わなくていいと言ったのはルイスだし、言いたくない事情を詮索するほど下世話ではないつもりだったが、どこかでアルバートが信用に足る人物であるのか図りかねていた。

「そう。いい先生なら良かったわ。スチュアートさんのことは、突然のことで困っていたもの。でも、お母様のご容態が優れないのなら、無理にお引止めするわけにもいかないし…ルイスは入学試験を控えているし…どうしようかしらと思っていたのよ」

「…入学試験は、大丈夫だよ。ちゃんと、合格するから」

ルイスは、苦笑してポーラに答えた。

ルイスが行く予定なのは、国内最高レベルと言われる名門校であったが、自信はあった。学力審査で落ちるとは思えなかった。通常以上の理解力と暗記力に恵まれていることに、ルイスは感謝していた。それは、どこか不遜な自信ではあったが、事実に裏打ちされていることでもあった。

「それよりも…新しい生活の方が心配かな。――それに、寄宿舎に入ったら、母さんの手伝いも出来なくなるし…」

ルイスは、棘のある種類の花を手入れしながらそう言った。

ポーラの白い手を傷つけないように、棘のあるものは自分で積極的に手入れするようにしていた。男である自分の方が、傷が残って

も問題ないだろうと思ったからだ。それに、ルイスはトゲで手を傷つけたことがあまりなかった。ポーラは、それはルイスが注意深いからだと、いつも褒めてくれる。

「――ルイスは、優しい子ね」

そんなルイスに、ポーラは微笑む。

ポーラはどんな些細なことでも、ルイスを褒める。それが、どんなに深い愛情からきているのか、ルイスはきちんと理解していた。

惜しみなく注いでくれる愛情に、ルイスは嬉しくなる。そして、少しだけ申し訳なく思った。

こんなにも愛してくれる人がいるのに、満たされているはずなのに。どうして、「寂しい」などと思わなければならなかったのかと。

自分がひどく恩知らずで嫌な子供に思えて、ポーラの「優しい子」という評価に、大嘘つきになったような気がした。

ルイスは、ポーラに分けてもらった花を、部屋の窓際にかざった。深い藍色のブルーベルと、毅然とした白の薔薇が部屋に飾ってあるのは多少に少女趣味かもしれなかったが、部屋の中を華やかにしてくれた。

ガーデニングを手伝っているだけあって、ルイスも花が好きだ。

花瓶の中で、ブルーベルと薔薇が丁度いい塩梅になるように細かい調整をしていた。
そうしていると、窓の外に人影を見た。ルイスが何気なくその人を見ると、それがアルバートだということが分かった。
ルイスの部屋のその窓からは、森が良く見える。そもそも屋敷自体が村の最東にあるのだから、その間にさえぎるものは何もない。
何をしているのだろうと、ルイスは疑問に思い、アルバートを目で追う。アルバートはこちらに背を向けて歩いている。つまり、森の方へ向かっているのだ。
ルイスは眉根をひそめる。あの森が危険だということはアルバートも承知しているはずだ。
自分自身が、あの森を悪くは思えないからといって、危険な森にひとりで行く人間を見かければ危ないと注意もしたくなる。
ルイスは、部屋を出ると、足早に外に出ようとする。
「きゃ…っ！」
しかし、廊下を走るという行為についてくる当然の危険性として、曲がり角のところで、メイドのひとりとぶつかってしまう。体重の軽いルイスと、小柄なメイドは、お互いにしりもちをつく格好となる。
「ご、ごめん。大丈夫…！？」
ルイスは、慌てて起き上がって、転んだメイドを助け起こしなが

らそう言った。

「大丈夫です…。それにしても、ルイス様、随分お急ぎなのですね」

歳若いメイドにそう微笑まれて、ルイスははっとした。

「…ああ……そうだ。ごめん！」

そう改めて謝罪してから、ルイスは走りはしないものの、足早に外に出た。

玄関を出て、森の方を見たが、そこには誰もいなかった。ルイスは、森の近くまで歩いてみる。

こんもりと茂った森の方を見ても、やはり人影はない。

「ルイスッ！！」

そんな中、大声で名前を呼ばれて、ルイスはびくりとなった。

「…と、父さん…」

「そんなところで何を？　危ないから魔の森へは近づいてはいけないと、昔から言っているじゃないか…。ルイス、お前はこの年寄りの寿命を縮めたいのか？」

スタンレーは、悲しそうに顔をゆがめてそう言う。

ルイスは、そんなスタンレーの反応を若干大げさに感じた。入ったわけではない。少し近づいて、様子をうかがっただけではないか。

だが、スタンレーがことこの問題になると大げさになるのは今に始まったことではなかった。

普段は、スタンレーはむしろ器が大きい。子供の頃ルイスが誤って花瓶を割ってしまっても鷹揚に笑っていたし、剣をやってみたいと言ったルイスに、真っ青になって危ないからと止めようとしたポーラをなだめたのはスタンレーの方だった。おかげで、ルイスは週に1回、街へ行って剣を習うことが出来るようになった。また、ルイスが多少の怪我をしても、『男は怪我をしながら強くなるものだ』とばかりにかまえていたスタンレーだ。

それなのに、スタンレーは、森のことになると、顔色を変えるのだ。

その変わりようはルイスから見ても不可解で、1度、森で何かあったのかと聞いたことがある。すると、スタンレーは聞き飽きたような、昔の伝説を持ち出してくる。そんな大昔の、嘘か本当か分からないような話を聞きたいわけではないのは分かるだろうとルイスは思ったのだが。

そして、その神経質さをもって、スタンレーは眉根をひそめていた。

「…分かってるよ。ただ……ヘストン先生が…この森に入ろうとしていたから…止めないといけないと思って…」

「ヘストン先生が？」

それは意外な返答だったらしく、スタンレーは目を丸くする。

「うん。途中で見失ってしまったんだけど…。だから、本当にこの森の中に入ったのかどうかは分からない。でも、こっちの方に歩いていたから」

「…とりあえず、ルイス。館に戻ろう。こんなところにお前がいると、私の事情が縮む…」

スタンレーはそう言いながら、ルイスの腕を掴むと、強引に歩き始める。

「でも……っ！　ヘストン先生が…っ！」

それに、ルイスは森を再度見る。

脳内に、ずっと聞かされ続けた森の逸話が駆け巡る。どこまで本当のことだか分からないと笑い飛ばしたはずなのに、実際に身近な人がそこに行っているとなると、心配の気持ちが勝った。きっと、この森に行きたがっていた幼い自分を見ていた両親も、こんな気持ちだったのだろうと、ルイスは思った。

「ヘストン先生には、この森が危険だと知らせてある。だから、わざわざ入って行くはずがない。もし仮に入っていたとしても…そのためにお前が危険を冒す必要はない」

「…そんな……」

スタンレーに引きずられるようにしながら、ルイスはそう言った。

「…もちろん、夜になっても先生が帰ってこなければ、皆に知らせ

よう。まあ、もちろん、何事もなく帰ってきてくれると思うがね。きっと、森以外のどこかに少し出かけているだけなのだから」

そういうスタンレーの言葉には、有無を言わせぬ響きがあった。

「でも…」

反論しかけたルイスに、スタンレーは泣きそうな顔を向ける。

「ルイス……」

「分か…った」

そんな懇願するような顔をされて、それをはねつけられるほどにルイスは強くなれなかった。

「お願いだ。ヘストン先生を追うためとはいえ…もう森の方へは行かないと約束してくれるね？」

「…はい」

その言葉が、スタンレーを安心させると知るから、ルイスはそう言う。

父親が、自分のせいで泣きそうな状況というのは、けして心地いいものではないのだ。

4．嘘つきな教師

落ち着かない。それが、ルイスの正直な感想だった。

アルバートの行方が気になるのももちろんだ。だが。視線を、感じた。

ルイスは苛立ったように、室内から出る。

すると、メイドが声をかけてくる。

「…あら。ルイス様。どちらへ？」

「……お手洗い！」

乱暴に言うと、ルイスはそのまま手洗いへ向かっていく。

小用を足しながら、不愉快な気持ちに耐えていた。

監視されている。それが、ルイスの正直な感想だった。ルイスが茶を所望しようとしたり、図書館に調べものをしに行こうとしたりするだけで、使用人たちの目が光って、自分を追っているのが分かるのだ。

全てスタンレーの言いつけなのだろうことは分かっていた。ルイスが、アルバートを追って森へ行かないように、使用人たちに監視させているのだ。

森へ行かないと約束したのに、あまりの信用の無さにルイスは傷

つきも苛立ちもする。いくらなんでも、過保護すぎやしないかと思うのだ。

ルイスは手を洗いながら、深呼吸をする。

たとえ過保護にすぎるとしても、それがスタンレーの愛情が故だということは分かっていたからだ。

だが、たとえ愛情から出た行為でも、不愉快なのは仕方がないのではないかと、心の中で別の声がする。虜囚のごとく、監視されなければならない理由など何もないと。スタンレーの愛情は見当違いだと、ルイスが思ってしまうのも事実だった。

だが、いらいらしても何にもならないとルイスは首を振って、手を拭って手洗いを出る。

部屋に戻る間際、2階の廊下から吹き抜けになっているホールの先の、玄関の扉が開くのが見えた。そこにいたのは、アルバートだった。それに、ルイスは目を見開き、慌てて下に行こうとするが、その前にスタンレーが、アルバートを出迎えていた。

ルイスが1階に下りたときは、2人の間で会話がなされた後だった。

「そうですか。つまらぬことを申して申しわけありません、先生」

「いえ。こちらこそお騒がせしたようで…」

そんな会話が最初に聞こえてきた。次の瞬間、スタンレーと目があった。

「ルイス、ヘストン先生は、森の方になど行ってないと。店で買い物をしてきただけだと言ってらっしゃるぞ。お前も慌てて見間違えたのだろう。…いえ、先生、本当に申し訳ありません。ルイスも悪気はなかったのでしょう。それでは、私はこれで」

スタンレーは軽くそう言って、背を向ける。まだ仕事が残っているのだろう。それでも、ルイスの言葉を受けて、アルバートの心配はしていたのだ。

だが、ルイスは2人のやり取りに不快感を覚えていた。主に、アルバートのあからさまな「嘘」に対して。たしかに、森の中に入ったという確証はルイスにもなかった。しかし、森の方へ行っていたのは事実だったのだ。あれは勘違いや見間違いなどではないと、ルイスは確信していた。目はいい方だったし、これほど見事な長い銀髪の持ち主を見間違えるはずもない。服も、今着ている黒い燕尾服だと確信できる。

もし、アルバートの答えが、『何らかの理由で森に近づいたが、入ってはいない』といったものだったら、ルイスもある程度納得できただろう。だが、近寄ってもいないとは。それは、間違いなく「嘘」だった。

「…いえ。お気になさらず」

苦笑しながらそう言うアルバートが、ますます信じられない存在として、ルイスの瞳に映る。

どうして、そんな嘘をつくのか分からなかった。興味本位で森の中に入ってはみたが、予想以上の騒ぎとなって、とっさに誤魔化したのか。

だが、下手をすればその嘘のせいで、ルイスが嘘つき呼ばわりされかねなかったのだ。幸い、スタンレーがルイスを信じていて、見間違いか勘違いだろうと思ってくれたから良かったようなものだ。それでも、保身のために嘘をついたのだとしたらそれは卑劣だとルイスは思う。

ルイスは、漠然と感じていたアルバートに対する不審の根拠を掴んだような気がした。

アルバートの容姿は万人が認めるほどに秀麗である。その秀麗な美貌が、これほど優しげに微笑んだら大抵の女性は夢心地になるだろう。しかしそれでも、ルイスにはその美しい微笑みが、うさんくさく気味の悪いものに見えた。

「…先生、本当に森の方へは向かっていないのですか」

ルイスは、不審と苛立ちを押し隠して微笑みながらそう訪ねた。

「――どうして、貴方は私が森の方へ行ったと思うのですか？」

「後姿を見ました」

「…そうですか」

「質問に答えてください…！　本当に…」

真剣にそう言うルイスを、アルバートは笑った。口の端だけで笑うそれは、嘲笑だった。

「そんな些細な真実の探求に何か意味がおありですか？　――貴方には、もっと大切な真実があるのでは…？」

「は……。何を…何を言っている…んですか！？」

ルイスは、説明のつかない恐怖に気おされそうになる自分を律してそう言った。

「……いずれ、お分かりになります」

もう気温は大分暖かくなってきているはずだ。それなのに、ルイスはその時、季節はずれの悪寒を感じた。

アルバートは変だ。得体が知れない。

それが、先ほどの会話を通してルイスが感じた結論だった。

本心では何を思っているのか、何のために家庭教師になったのかすら、分からない。このままアルバートを放置していたら、取り返しのつかないことになる気がした。

しかし、だからといってどうすればいいのかルイスには分からなかった。

スタンレーに、親に告げ口をするような真似は避けたかった。スタンレーにいかにアルバートが気に食わないか訴えたら、あるいは

アルバートを解雇してくれるかもしれない。だが、それ以上に、ただの「子供のわがまま」としか思われない可能性の方がはるかに高いように感じられる。

それに、マライアの顔をつぶすことにもなる。アルバートがマライアの紹介状でこの屋敷に来た以上、アルバートに非があればマライアの責任問題にまで及びかねない。

そこまで考えて、ルイスは思い立って、マライアに手紙を書き始めた。アルバートとはどのような知り合いで、どのような経緯で紹介状を書くに至ったのか、そしてアルバートはどういう人物なのかについてだ。

純粋に好奇心ゆえだと思ってもらえるような文面を心がけ、手紙をしたためる。そして、ルイスは読み返して頷いた。これならば、マライアも不自然には思わないだろうと思ったのである。

まずは敵を知ることだと、ルイスは思ったのである。

ルイスは、スタンレーにアルバートを解雇させずにいた1番の理由を、自分でも正確には把握していなかった。

ルイスは、どうしても敵前逃亡するような真似はできない性格をしていたのだ。

張り詰めた空気が漂う。

ルイスはアルバートの授業を受けているが、そこに教師とその教え子の親愛の雰囲気は皆無だった。そこにあるのは、ルイスが発する緊張。完全に警戒しているのだと、アルバートは空気で理解していた。

ピンと張り詰めた空気は、まるで限界まで引かれた弓のようだとアルバートは感じた。少しでもきっかけがあれば、真っ直ぐに矢が放たれそうなほどの緊張感。

ルイスが発するそれを心地いいとアルバートは微笑む。

アルバートにルイスが敵意を向けているからといって、それが彼の勉学の妨げになっているということは一切なかった。

敵には侮られたくない。その矜持が透けてみえるほど、緊張感を持ってルイスはアルバートの言葉を聞いている。1度教えられたことは2度と問い返さずにすむように。

その強気をアルバートは好ましいと思う。

アルバートから見て、ルイス・カルヴァートという少年は優しすぎた。

おそらく、この10年余の間、強烈な憎悪にさらされたことも、苛烈な苦難を感じたこともなかったのだろう。満たされて育った者特有の、捻じ曲がったところのない真っ直ぐな善意が全身を包んでいるかのようだった。

満たされて育った少年は、アルバートの瞳に、純粋ではあるがどこか頼りなく見えた。

だが、ルイスがアルバートを敵だと認識してからの、この気はどうだろうか。

スタンレーに泣き言を言って、自分を解雇させることもできたのだろうに、それをよしとはしない。そして、弱みを見せてなるものかとばかりに緊張を保って、アルバートと向き合う。

その事実が、アルバートには嬉しい。

だが、アルバートはその狂おしいほどの歓喜をけして表に出したりはしない。表面上は、ただ静かに微笑しながら授業をしているように見えるだろう。しかし、その内側で、アルバートの心は歓喜に打ち震えていた。

4．嘘つきな教師（後書き）

不審な行動を取るアルバート。だんだん、うさんくささが現れてきています。

5．甘いグミの実と苦い記憶

ルイスはアルバートに弱みを見せることにならないように、今まで以上に熱心に勉学に取り込んでいた。

だが、息抜きは必要だ。アルバートが来てから、屋敷の中まで敵地のようでルイスは落ち着けなかった。だから、村を散策することにした。

空は気持ちよく晴れている。家々の様子を見て、今日が主婦にとって絶好の洗濯日和であることを知る。白いシーツが風にたなびく様を、なんとなしに心地よく見つめる。

春まきの麦が色づきはじめ、黄金の絨毯のように広がっている。風にそよぐ麦は、心地よさげにさやさやと音を立てていた。この調子でいけば、今年は豊作になるだろうとルイスは嬉しくなる。

貿易商であるルイスの家では、麦の収穫はそれほど直接に関わりがないが、小麦の値段が上がれば、パンの値段も釣りあがることは理解していた。それだけでなく、この麦を育てているのは、昔、共に野原を駆け回った友人やその家族たちなのだ。

旱魃や嵐などで、村が大不作の時は、スタンレーは、村人に無金利で金を貸すことがあった。村人を雇って、パーティを催すこともある。

ルイスが6歳の時、この村で酷い旱魃があったことがある。春の終わりになれば、黄金の麦で色づくはずの畑は、無残にひび割れた大地をさらしていた。友人の父親が、感情をなくした瞳でぼんやり

と畑を見つめているのが忘れられなかった。

だから、そんな中、客人を招いてパーティをするというスタンレーの企画が、ルイスにはとても無責任に思えたのだった。村人たちは明日の生活でさえ分からないのだ。そんな中、パーティなどと不謹慎にすぎると義憤に駆られたりもした。

だが、ほどなくルイスは違うのだと気づいた。人がこの村に来るということは、この村での消費が活発になるということだった。村人たちは、屋敷に雇われたり、臨時の商売を始めたりすることで糊口をしのいだ。

また、そのパーティでまとまった商談による利益で村人を雇い、堤を築きなおす工事をした。これによって、多少の旱魃では困らない水路が確保されるようになったのだ。

ルイスは、そのことで純粋にスタンレーを尊敬する気持ちが増した。そして、ノブレス・オブリージュという言葉を理解したのだった。

カルヴァート家は貴族ではない。しかし、裕福な商人であり、スタンレーには才能があった。

この一帯を治めているはずの伯爵家は、先祖代々の資産をすでに食い潰し、家計はすでに火の車なのだと、ルイスも伝え聞いていた。また、たとえ富があったところで、貧しい一村を助ける気があったかどうかはルイスには疑問に思えた。

ルイスは、幼心に、伯爵なんて名ばかりの称号を持っている貴族なんかより、「成り上がり」と上流階級では馬鹿にされるスタンレ

ーのほうがよほど偉いのだと思った。成り上がりの何が悪い。古びた血筋なんてものよりも、自らの才能と努力によって得たもののほうがよほどすごいに決まっている。人柄も、スタンレーは十分に尊敬に足る人物だとルイスは思っていた。

だからこそ、ルイスは今、疑問なくカルヴァート家の跡継ぎを目指している。

そんな物思いにふけっていると、後ろから声をかけられた。

「…ルイス……！？　さ、様？」

敬称がどこかぎこちない呼びかけに振り返ると、そこにはよく日焼けした健康的な肌と、薄茶色の短い髪。そして、薄い青の瞳を持った少年がいた。

「――ビリー！？　久しぶりだな、元気か？」

その姿に、ルイスは思わず笑顔になる。

「げ、元気だよ…。いや、元気です。ルイス様も…」

「…ビリー、気づいてないのなら言うけど、今は俺たち以外にだれもいないんだけど？」

「……でも」

「お前がどうしても、『様』付けにしたいっていうのなら俺に止める権利はないけどね。悔しいから、お前のことも『ビリー様』って呼んでやろうかな」

「…て、それどんな結論だよ！」

すねたようなルイスの言葉に、ビリーはそう言って笑う。ビリーはすぐにはっとしたが、ふっきれたように2人で苦笑した。

「いやいや。ビリー様に川に突き落とされた恨みは一生忘れないでやろうと俺は心に誓っているんだ」

ルイスがおどけて言うと、ビリーは明るく笑う。

「…自分のこと棚に上げんなよな！　もとはと言えば、お前が落とし穴にひっかけてきたんだろうが！」

「…まさか本当に引っかかるとは思わなかった。あんなにバレバレだったのに」

ルイスは、そう言って、にやりと笑ってみせた。

「…相変わらず嫌な奴だなぁ……」

遠慮のない言葉に、ルイスは少し嬉しくなる。距離を感じていたが、1度うちとけてみると、こんなにも変わってないのだと思える。それが、とても嬉しかった。

「そう言うお前は……妙に背が伸びてないか！？　昔は俺よりチビだったくせに！」

ルイスは、再会して1番気になっていたことを口にして顔をしかめた。

「ああ…ここ1年ぐらいすごく背が伸びて…。ルイスは性格の悪さも身長も相変わらずだな！」

失礼にも笑い飛ばして、ビリーは、ルイスの頭に手を置く。

「失礼な…。お前が伸びすぎだよ」

悪態をつくルイスに、ビリーは笑っていた。

「…何？」

「いや、お前の母ちゃんが、お前のそんな姿見たら卒倒しそうだと思ってさ。親の前では随分ぶりっこしてんだろ。遠目で見ててさ。あのルイスも随分変わったもんだと思ってたら、全然変わってねえんだもん。これのどこを笑わずにいれと」

「…そんなにぶりっこしてるつもりはないんだけどね…」

照れ混じりに、ルイスはそう言う。

こうした、屈託のない会話も久しぶりな気がした。ただの会話が、ひどく楽しかった。

「なつかしーな…。そういえば、この時期になると、俺とお前と…あと、フレディやネイサンたちとさ。グミとか取って食べてたよな。ほんの2年か3年ぐらい前なのになー」

ビリーはそう言って、少し遠い目をする。

「今は？」

「うーん…。時々ね。でもお互い家の手伝いで忙しかったりさ」

「そっか…」

ルイスはそう言いながら、昔を思い出す。

グミの木。ルイスは、グミの実が好きだった。家で食べる甘いケーキやクッキーとは違った、みずみずしい甘さ。それを、皆で競いながら食べたのだった。

遠慮なんて知らなかった。相手に腹が立てば素直に喧嘩をしたし、ルイスの家が特別裕福だからと特別扱いをする子供も、仲間はずれにする子供もいなかった。

そんな楽しい思い出で、ルイスの胸はいっぱいになる。

「でも…1回『魔の森』へ行こうとして、こっぴどく叱られたことがあるよな。俺はあの後、母ちゃんにすっごい怒られたんだけど、お前は？」

そう問われて、ルイスは少しぞっとした。

それは、ルイスにとってはとても、苦い記憶。

あの日、ルイスは皆と笑いながらグミの実を食べていた。腕白盛

りの男の子が４人。競うようにして取ってしまえば、めぼしいグミはなくなっていた。

グミは、村の子供たちにとって春の贈り物だ。毎年、この季節を楽しみにして、グミやキイチゴを探すのは、いつの時代も変わらぬ、子供たちの最大の楽しみだった。

だが、すぐになくなってしまうグミに物足りなく思ったその時、グループの中では最年長だったネイサンが分け知り顔で口を開いた。

『…そういえば、魔の森の中に、グミの実がたくさんなってる場所があるって知ってる？』

『たくさんって？』

質問をしたのはビリー。

『たくさんって言ったらたくさんだよ。…だって村の中のは、他の子たちにも食べられちゃうだろう？　でも、魔の森には誰も入っていかない。だから、手付かずのグミの実がたくさんあるんだよ！』

瞳をキラキラと輝かせながらのネイサンの言葉に、皆で目を見合わせる。

『…でも、あの森には魔物がいるってママが……』

怖そうな顔をするのは、最年少のフレディだった。

『なんだよ、フレディ、お前怖いのか！？』

ビリーはそう言って笑い飛ばす。

『俺も…あの森は……行くべきじゃないと思う。…魔物はともかく、迷子になるかもしれないし……』

ルイスは、その中で慎重に意見を述べた。

何かあったときに、責任が取れない。そう思ったからである。

『…へぇー。ルイスって案外臆病なんだなー』

そう言ったのは、ビリーだ。

『な…！　俺は臆病じゃない…！！』

その時のルイスにとって、臆病だと思われることほど屈辱的なことはないように思えた。今ならば、無謀と勇敢、慎重と臆病は同一ではないとでも反論できたのだろうが、ルイスもまだ、８歳でしかなかった。

『なら行けるよな？』

ビリーの言葉に、ルイスはぐっとつまってしまう。

『大丈夫だよ。奥まで行かなければさ。あの森には誰も近づきもしないから、奥まで行かなくても手付かずのグミぐらいあるって』

そうまとめたのは、提案者であるネイサン。

それで、結局彼らに押し切られるようにして、ルイスは森の方へ

行くことになった。いや、ルイス自身もあの森に近づいてみたいという誘惑を、抑えられないのかもしれなかった。

しかし、子供のそんな行動など、森に入る前に村人に感づかれ、村へ連れ戻された。丁度ルイスの屋敷に用事があってきていた男が、森の方へこそこそと行こうとしているルイスたちを見つけ、保護したのだった。

ビリーは、皆の前で父親に拳骨をくらい、大泣きしながら家に連れ戻された。フレディは、叱られる前に大泣きをしてしまい、迎えに来た母親は叱るどころかなだめながら、フレディをつれて帰った。ネイサンは泣きはしなかったものの、唇をギュッとかみ締めたまま、父親と一緒に帰っていった。

そして。ルイスを迎えに来たのは、スタンレーとポーラ。

スタンレーは青ざめ、ポーラは泣いていた。

ポーラの涙に、ルイスは口の中に残ったグミの甘酸っぱい味が、口の中でまるで甘い毒のように思えた。

『…ルイス、私は言ったはずだ。あの森には入ってはならないと…。……グミを取りに？　私たちは、お前を十分に愛して育ててきたつもりだったが、お前にとって自分の命の価値はグミより小さいのか…？』

スタンレーの言葉は、正論だった。だからこそ、ルイスは奥歯を噛みしめてそれを聞く。

だが、ルイスの唇が謝罪の言葉をつむぐよりも先に、反応したの

はポーラであった。

『駄目…駄目よ。駄目なのよ……！　貴方、この子は森へ行っちゃうのよ…！！　定めなのよ…！！　いなくなっちゃうの…！　神様、どうかこの子を…！　いやあああああああああああああ！！』

『ポーラ！！』

ポーラは、悲鳴をあげて、失神した。スタンレーは慌てて、ポーラの細い体が床に叩きつけられる前に、それを支える。

ルイスは、ただ、目の前の情景に、目を見開いて、唇をわななかせることしかできなかった。

『ルイス。頼む。２度と。森へは行かないでくれ…！』

俯いての、スタンレーの言葉が、呪縛のようにルイスの脳裏に刻まれる。

グミの甘い味と共に刻まれた、苦い記憶。

「おい、ルイス！」

ルイスは、はっとなる。目の前では、ビリーが不可解そうにルイスの顔を覗きこんできた。

「どうしたんだよ。ぼうっとして」

「あ…いや。ごめん。グミで色々思い出して……」

慌ててそう答えて、ルイスは呼吸を整える。白昼夢のような鮮やかな記憶。

人は、辛いことは出来るだけ思い出さないように出来ている。だからこそ、ルイスも積極的に思い出すことはほとんどなかった。

ただ、『森へ行ってはいけない』という言葉を呪縛のように残して、あの苦い記憶を、ルイスはほとんど意識しないところまで追いやることに成功していた。しかし。

「…なつかしーな。魔の森の方へ行くのは結構きもだめしみたいで怖かったし」

「――父親に殴られて大泣きしてたくせに」

精一杯強がって、ルイスはそう言って馬鹿にしたように口角を上げる。

「…だってうちの父ちゃんまじ怖いんだぜ！？　正直、森の魔物なんかよりよっぽど…ってやべ！　これ以上道草してたら、また魔物より怖ぇえ父ちゃんにどやされる！　じゃな！　ルイス！！」

ビリーはそう言って、ルイスに背を向けてかけてゆく。しかし、すぐに振り向いた。

「ルイス！！　またな！　時間があったら遊ぼうぜ！」

「ああ！　ビリー！　早く行かないとまた殴られるよー？」

それに、ルイスは笑顔でそう言う。

「ちえ！　人事だと思いやがって！　じゃ！」

そう言って駆けてゆくビリーの後姿は、背が伸びただけでなく、しなやかな筋肉もできかかっていることを教えていた。

きっと、畑の重労働を手伝っているうちに出来た筋肉だ。

ビリーと久しぶりに親しく話せた喜びとは別に、ルイスの胸には棘のような違和感が突き刺さっていた。

今まで気にしていなかった事実。

どうして、スタンレーやポーラはここまで病的に、ルイスが魔の森と関わることを気にするのか。それが、どうしても分からなかった。

特にポーラの反応は異常だ。ポーラは、「定め」と言っていた。何の定めだというのか。ルイスには全く心当たりがない。

「『定め』…」

理解できない言葉を、言葉にしてみせる。

答えがほしいと、思った。

6．美しき異形

過去の記憶の不可解さと、アルバートの行動の不可解さには両方ともひとつのキーワードがある。「リファーズの森」。

スタンレーとポーラは過剰なまでに、ルイスが森へ近づくことを厭い、アルバートはこそこそと森へ赴く。

しかし、だからといって、森の中に入るという選択肢はルイスにはなかった。ポーラの涙が、ルイスにとっては楔となる。

そして、スタンレーとポーラに聞き出すというのも、ルイスには取りたくない手段だった。両親の心を痛めたくないと思えば、それは自然だった。

だからこそ、ルイスはアルバートが森へ行ったという証拠をつかむことにした。

スタンレーはルイスが森へ近づくだけで嫌がるが、慎重に森の近くの大岩の影に隠れる。

ルイスは、アルバートが先刻森の中に入ったことを確認していた。

1度ならず2度までも。となれば、アルバートは何か目的あって森へ行くのだろう。好奇心に負けて、森に行ってみたというだけではないはずであった。

出てきたところを押さえ、真意を問う。それが、ルイスの取った手段だった。現場を押さえられれば、言い訳もできないだろうとい

う、ある意味単純な目論見ではあった。

しかし、いつまで待てばいいのか分からない時間、待ち続けるというのは存外に辛いものがある。斜陽の日が、世界を赤く染める。ルイスは、不安げに辺りを見回した。さすがに暗くなったら、森の外とはいえ危険かもしれないという危惧があった。暗くなる前にここを去らねばならない。

だが、アルバートはまだ現れない。

『…ケテ……。…ビシイ……』

ふと、声が聞こえた気がして、ルイスははじかれたように森を見る。だが、森の方に変化はなかった。ただの空耳だったのだろうと結論付けて、ルイスは再びアルバートを待つことにした。

しかし、一向にアルバートは現れない。

ルイスが焦れて、他の場所から出てしまったのではないかと不安になっていた時、森の中から人影が現れた。

アルバートだった。

だがしかし、その瞬間、ルイスはアルバートに真意を問いただすなどということを完全に失念していた。

なぜなら。アルバートは、傷を負っていたからだ。それも、深い傷であった。秀麗な顔を、額から流れる赤い血が濡らし、服ごと切り裂かれた体の傷から、血が流れている。その傷のいくつかは、とても酷いものだと、素人目にも分かるほどに全身から出血していた。

――得体の知れない相手。敵意すら向けている相手。

そんな相手が、深い傷を追っていると知った時、ルイスは。

ただ、心配をした。計算もなく、飛び出して行って、怪我の処置をしようと自然に思った。

その瞬間、ルイスの瞳に映ったのは、得体の知れない相手でも敵でもなく、ただの怪我人であった。怪我人を見た自然な反応として、ルイスの胸の中には気遣い意外の感情は希薄となっていた。

ルイス・カルヴァートという少年の本質は、ただ善良だったのだ。

「――私としたことが、ぬかりましたね…。思いのほか…聞き分けのない……」

飛び出していこうとしたルイスの足を留めたのは、アルバートの独り言だった。最後に舌打ちをして不快さを表にするアルバートの声音は、ルイスからみて、異様だったのである。本来なら、立っているだけでも辛いはずの傷のはずだった。

その怪我人にしては、元気…というよりも、冷静すぎる声音に、違和感が胸の中で膨らんでゆく。

そして。ルイスは見た。アルバートの瞳が、金色に染まっているのを。

ルイスの瞳は驚愕に見開かれる。アルバートの瞳は、自分と同じような琥珀色でしかなかったはずだ。淡い黄色に近い茶色の瞳は、

確かに金に近く、光の角度によっては金色がかって見えるときすらもあったが、こんなに鮮やかな金色の瞳を持つ人間がこの世界にいるはずがなかった。

光る瞳は、斜陽の光を反射したものでは断じてありえない。それは、アルバートの秀麗な顔の中で、存在を主張して輝いていた。

そして、瞳を輝かせたまま、アルバートはぶつぶつと何か呟く。すると、まるで時を逆に再生するように、アルバートの傷が修復していった。ぱっくりと割れていた額の傷がふさがれていく。服の下に隠された体の傷にも同じことが起きているのだと、ルイスは確信した。

アルバートは、ハンカチを取り出すと、傷ひとつなくなった顔の血を拭ってゆく。それにより、血に汚されていた美貌が、改めて明らかになる。

そして、ルイスは、これほど美しいものを初めてみたと思った。いや、アルバートを初めて見た時も、ルイスはアルバートほど美しい男性を始めて見たと思ったのだ。だが。男性のみならず、すべての生き物の中で、これほど凄絶に美しいものは存在するはずがないと、ルイスは信じた。

魂を丸ごと鷲づかみにするほどの、美貌。冴え冴えとした月を写したかのように。

その事実に、ルイスは恐怖した。

アルバートは、人ならざるものだと、ルイスの本能が告げていた。——アルバートは、魔なのだ。傷を直ちに修復したから、魔なので

はない。瞳が金色に輝くから、魔なのではない。それ以上に、こんなにも。こんなにも、美しい存在が、人であるはずがない。

恐怖が膨れ上がる。

――魔の森の伝説のなかのひとつ。醜い魔族の存在を語ったのは誰であっただろう。この世のものとは思えないほどに醜く、その容貌を見ただけで、心の臓が破裂して死んでしまうほどの醜悪な魔族。曰く、焼け爛れたかのような肌を持っている。曰く、目は縦に裂け、髪は蛇であり、口は耳まで避けている。一目でも見ようものなら死んでしまうらしいのに、もっともらしく語られた、異形。

それを聞いて、ルイスは一目でも見たら恐怖で死んでしまうのに、なぜそんなに細かいことが伝わるわけがあるのだと、子供心に賢しらなことを考えていた。だが、それと同時に。恐ろしいと思った。

人間の想像の限界を尽くしたかのような「醜さ」は、ルイスの旺盛すぎる創造力によって、よりリアルに脳内で再現されていた。あまりに醜く、この世の全てを呪っている魔族。それは、子供心に可哀相に思えたが、それにも勝って恐ろしかった。

だが、今ルイスが実際に目にする異形は、美しい。美しいがゆえに、恐ろしい。

あるいは、この圧倒的な美貌は、どんな醜悪な容貌よりも恐ろしいのかもしれない。ルイスはそう思った。

そして、ルイスは恐怖のままに体を素直に動かす。なるべく、その恐ろしい生き物から離れられるように。無意識のうちに、足が後ろに動いてゆく。

パキッ。小枝を踏みしめる音が、響く。

ルイスは、それに目を見開き、自分の荒い呼吸を意識していた。呼吸をしなければならないことが呪わしいほどに。鼓動をうたなければならない生き物であることが呪わしいほどに。呼吸音のひとつ。心拍のひとつが、目の前の異形に気づかれるきっかけとなりそうで、ルイスの恐怖は最高点に達する。

「…やはり、私ひとりでは駄目なようですね。……申し訳ありませんが、お手をわずらわせることになりそうです…ルイス君」

独り言のように呟かれた言葉のその先。そして。アルバートの金色の瞳と、ルイスの瞳が、交わる。

一瞬の間。

「う……うわあああああああああ！！」

ルイスは、悲鳴を上げて逃げ出す。

一刻もはやく、アルバートの。いや、この得体の知れない生き物の前から、逃げなければならないと、本能が告げていた。

だが、逃げるルイスの腕を、アルバートは掴む。

それにルイスは、再度悲鳴を上げた。だって、無かったはずなのだ。後ろから、追ってくる気配など。忽然と現れたとしか思えない唐突さで、その手はルイスの手首を捕まえていた。

「…協力していただきたいことがあります。私とともに来てくださいませんか…？」

「嫌だぁ！！」

ルイスは、アルバートの顔を見ないように目をつぶって、駄々っ子のようにそう言った。

アルバートの言葉を理解していたわけではない。ただ、この恐ろしい状況から、何とか開放されたい、ただそれだけだった。

そんな頑ななルイスの顎を、アルバートは、手首を捕まえているのとは逆の右手で、ルイスの顎を捉えて、顔を上向きにさせる。ルイスがどれほど抵抗しても、それはやすやすと受け流されてしまう。

「…頑なであらせられますね」

そのアルバートの声が聞こえる位置が、驚くほど近いことによって、ルイスは、アルバートと自分の顔の位置が、ほとんどキスでもするかのごとく近いことを知る。

そうと分かれば、瞼の裏の闇ですら恐ろしくなる。目の前のアルバートが、何をしようとしているのか。そして、目の前にいるのは、先ほどの恐ろしい魔性の姿なのか。それとも、更に本性を表して、もっと恐ろしい姿に変じているのか。

分からないということが、ルイスの恐怖を煽る。

心臓はもはや早鐘のようで、このまま恐怖のあまり死んでしまう

のではないかと、ルイスは思った。

そして、ルイスは薄目をあける。

そして。ルイスの目に飛び込んできたのは、笑みだった。アルバートの瞳は、相変わらず金色に輝いている。白い肌はしみひとつない白磁。銀色の髪は、月光をつむいだかのよう。その、人ならざる美が、ルイスに極上の笑みを向けていた。

ルイスの思考が、ただその美しさへの感嘆だけで埋まってゆく。

「……私と共に。森へ来てくださいますね…？」

ただ、ルイスはアルバートの笑みに魅了される。

『ルイス。頼む。2度と。森へは行かないでくれ…！』いつかの、誰かの言葉が、ルイスの胸の中で響く。ああ、だがそれが何だというのだろう。そんなことなどどうでもいい。

ただ、目の前の類まれなる美貌を目に焼き付けたい。ただ、それだけ。

歳よりはるかに若く見える可憐な女性が、その顔を悲痛にゆがめて涙を流している。だが、そんなこと関係ない。

きっと、頷いたら、この美貌は微笑んでくれる。それ以上に大切なことなんて、ない。

「は……」

頷きそうになったその時、唐突に、ルイスの腹の底から、怒りがこみ上げてくる。

何故、思い通りにならなければならない。何故、意思を捻じ曲げられなくてはならない。この、自分が！！

その、怒りが、ルイスを覚醒させる。夢から覚めたかのように、突然はっと正気に戻った。

そうなると、意思を操られそうになった怒りと、心を操作されていた恐怖が胸を駆け巡る。

「……断る！！」

叫ぶと、ルイスを拘束していた腕の力がゆるむ。その隙にルイスは、一目散に駆け出していた。古から伝わる神話のように。けして後ろを振り返ってはいけない気がした。

残されたアルバートは……笑っていた。

ただ、肩を震わせて笑っていた。

そのアルバートの頬には、深い傷がある。鼻から頬にかけて、秀麗な美貌をその傷は無残に横切っていた。

先ほど、森の中から出た時のものではない。それは、ルイスが見て驚愕したように、すでにアルバートは自らの力で完治させていた。

だから、森の中で負った傷とは関係がない。これは、新たに出来た傷。

ルイスが、拒否の言の葉に乗せて無意識に放った「力」によるものだった。

油断をしていたこともあるだろう。だが、アルバートにこれほど深い傷を負わせるほど、強力な「力」を、ルイスは放っていた。

「……そんなにも、『今』に固執されますか…」

アルバートの脳裏に浮かぶのは、スタンレーを尊敬し、ポーラに親愛の情を向ける、ルイス・カルヴァートの姿。それは、どこかアルバートの感傷をえぐるものだった。

ああ。それが、真実であったのなら、どれだけ良かっただろう。

ルイスは、アルバートからみて幸せな少年だった。人間から見れば永久に等しい時を生きるアルバートから見て、人間の一生などはかないものだ。だが、そのはかない時を、ルイス・カルヴァートという少年ならば、幸せにすごすのだろうとアルバートは思った。

アルバートは悲嘆からのため息をつく。それは、人の心をえぐる悲痛さに満ちていた。

「…私はいつでも、貴方から奪うことしかできないのですね…」

彼が見ているのは、いつだって。自分ではないのだから。

7. 森へ

屋敷まで戻ってきたルイスは、自分が酷い顔をしているのだろうと思った。顔は恐怖にこわばり、ガタガタと震えている。

そして、屋敷を不安げに見る。帰る家はここしかないが、同じ場所にアルバートが帰ってくるという、恐怖。

今から思えば、なぜアルバートと一緒に過ごすことなど出来たのか、ルイスには不思議だった。あの魔性から、授業を受け、紅茶を入れてもらっていた。

そのことのほうが、ルイスには夢のようだった。

ルイスが無我夢中で玄関から屋敷の中に入ろうとしていると、背後から声をかけられた。

「そんなに血相を変えてどうしたのです？　魔物にでも出会ったような顔をしていますよ」

そう言ってきたのは、アルバートだった。

瞳はいつもの落ち着いた琥珀色。どこで着替えたのか、それとも修復したのか。服は、切り裂かれて血のついたものではなく、真っ白なシャツと、黒い燕尾服。

それは、いつもの家庭教師の姿だった。少しだけ不思議そうに、穏やかに微笑んでいる。

その姿に。ルイスは全て夢だったのではないかと思った。

あれは、全てアルバートを待ちくたびれて寝てしまったがゆえの、悪夢の産物なのではないか。

人は誰しも、自らの平和が脅かされたいとは思わない。人ならざるものが、身近な人間として、生活に進入してくることなど、あってほしくない。あってはならないことだと、そう思ってしまうのだ。希望的観測という、逃げ。

だが、ルイスの矜持が、その逃げ道を選ぶことを自らに許さなかった。

「魔物？　それは貴方でしょう。いや。お前は、何だ……！　何のために俺たちに近づいた！　何をしようとしている！！」

目の前にいるのは、恩師ではなく、敵なのだと自分に言い聞かせて、ルイスはアルバートを睨みつける。

「――なるほど。誇り高くていらっしゃるのですね……」

それに、妖艶に微笑むのは。間違いなく先ほどの魔だった。

「ふざけるな……！！」

ルイスはそう言って、恐怖を原動力に、アルバートの胸元を掴む。だが、アルバートの長身はびくともしなかった。

「――そのような非力な身に留まっているのは、お辛いでしょう？目の前の不快な存在すら蹴散らせない……。力なきものは力ある

ものに蹂躙されるが定め。貴方はそれをご存知のはずだ。だからこそ、そのような無力な人間の器では……辛いのは貴方のほうではありませんか？」

「何を言っている！！」

わけの分からぬ言葉に、ルイスは厳しい声を上げる。

だが、その胸のうちは、不思議にざわめいていた。

これ以上聞いてはいけない。そう、本能が告げていた。

「真実を、知りたくありませんか？　貴方は、真実にふたをした、あいまいな事実だけで満足されるような御方でしょうか？　そう。それが、自らの傷をえぐることでも…真実を誤魔化さずに見据える。それが、私の知っている…貴方の姿です…」

嫌だと。本能が叫んだ。

彼の言葉に耳を傾けてはだめだ。古から、悪魔は人の心に蜜をたらすのだという。甘美な蜜の中に、致死量の毒を含ませて、目の前でちらつかせる。それが、ルイスが物語の中で知る、悪魔の姿。

彼の言葉をこれ以上聞いては、いけない。

ルイスは、自らの確信と共に、再び背を向けて逃走することを決定した。

玄関の扉を開けるわずかな動作ですら、隙になる気がして、がむしゃらに逃げる。そして、気がつくと、ポーラといつも手入れをし

ている庭にたどりついていた。

ルイスは、無我夢中で薔薇のアーチをくぐる。

昼間は花が咲き乱れる庭園も、室内からの遠い明かりと月の光しか照らさぬ夜の庭では、全ての花も眠っているように見えた。今更ながら、ルイスはあたりがすでに夜になっていることに気づく。

息を整えていると、草を踏む音がして、ルイスはとっさに樹木の陰に隠れた。追いかけてきたアルバートだと、なぜか確信した。

だが。

「ヘストン先生とも一緒ではありませんでしたか……」

落胆したように言うのは、スタンレーの声だった。

それに、ルイスは思わず声を上げそうになった。しかし、その後に続く声音。

「ええ。残念ながら。ルイス君はいつから姿が見えないのですか？」

「5時ごろから出かけているらしく……。今まで、こんなにも遅くまで帰ってこないなんてことはなかったのですが。村の方にもいませんし……」

スタンレーは弱りきったような声を出す。

「たしかに遅いですが。ルイス君もまだまだ子供です。遊んでいて時間を忘れることとてあるかもしれません。捜索はすべきかもしれ

ませんが、そこまで悲観する必要もないかと……」

アルバートは、スタンレーを気遣うような声を出していた。

それに、ルイスは、内心で『大嘘つきめ』と罵っていた。先ほどまで、自分と声を交わしていたのはどこの誰だというのだろう。帰ろうとしていたものを、怖がらせてこんなところで馬鹿みたいに隠れる羽目に追いやったのは自分ではないかと、ルイスは内心でアルバートを激しく罵った。

しかし、こんなところに隠れていて、今更出て行くのも間が抜けている。しかし、これ以上姿を現さなかったらもっと大げさなことになるかもしれない。

そう思ったルイスは、タイミングを計るために、スタンレーと、アルバートの姿をこっそり確認した。

今自分が出て行って、嘘を暴いたら、どれだけスッキリするだろうという、挑戦的な気分でもあった。しかし、そんなことになったら、窮鼠猫を噛むのごとく、何をされるのか分からない。ここは、一旦出てアルバートの出方を待つべきだと、そう計算をしていると。

アルバートと、目があった。アルバートは、その瞬間、口の端を少し引き上げた。

スタンレーは、こちらに背を向けていて、気づいていない。

アルバートの視線に、恐怖を感じた瞬間、ルイスは術にとらわれていた。体が、動かない。金縛りにでもあったかのように、指一本動かせなくなっていた。

「ですが……。ルイスは、もしかして魔の森へ行ったのかもしれないと……。そう思うと…とても……」

ルイスの苦境など知るよしもないスタンレーは、そう弱音を漏らす。

「森へ？　なぜです？　あの森が危険なのは、この村の人間なら、周知の事実なのでしょう？」

それに、アルバートが訝しげにそう訪ねる。

「ええ……。ですが、ルイスは……。昔から……しきりにあの森を気にしていましたから。いつかこんな日が来るのではないかと……。私たちはずっと……」

スタンレーの声は、ルイスが驚くほどに、弱弱しかった。

「ですが、たとえルイス君がかつて森に興味を示したとしても、幼い子供の好奇心でしかありませんよ。ルイス君は聡明な子です。今更、禁じられたことを破るような愚は犯さないでしょう」

「ですが。もしも、ただの子供の好奇心でなければ……？」

スタンレーの言葉に、未だ動けずにいたルイスは固まる。

どういう意味なのか、分からなかった。

「――どういうことです」

「……いえ。何でもありません。ちょっとした……」

そう言うスタンレーの声音は、明らかに何かを誤魔化していた。

そして、そんなスタンレーの言葉に焦れたように、アルバートの瞳が金色に輝きだす。

「ひっ！」

その瞳に魔性を感じたのか、スタンレーは、単純に恐怖にすくみあがった声をあげる。しかし。

「スタンレー・カルヴァート……。どういうことでしょうか？」

そう、アルバートが告げた途端。驚くほど、スタンレーは従順になっていた。

「あの子は……森へ帰ってゆく定めなのやもしれないと……。妻と私は……ずっと……」

答えるスタンレーの声は、妙に抑揚がなかった。

「『帰る』？　妙ですね。森こそが、彼の故郷のようだ」

「ルイスは……森から来た。……妻が森から拾ってきた子供なのです」

スタンレーの言葉に、ルイスは目を見開いた。

「……詳しい経緯を教えていただけませんか？」

「あれは１０年と少し前……。そう。冬のことでした。妻は、流産したのです……。私と妻の子供は……生まれて１週間もせずに、高熱を出して……逝きました。私も相当のショックを受けましたが……妻は。元々、とても愛情深く、そして、弱い女だったのです……。彼女は、精神を病んでしまいました……。屋敷の中を、探し回るのです……。『私の赤ちゃん、どこ？』と。何度あの子は死んだのだと言っても……彼女は……！！」

そこで、淡々とした声音が嘘かのように、スタンレーは喉を詰まらせた。

そこから先は、立て板に水のごとく、スタンレーは全てを話し始める。

「私はどうすればいいのか分かりませんでした……。ただ、妻に教え諭すことしか出来なかった……！　ですが、ある晩、注意して見ていたつもりだったのですが……妻が、脱走したのです……。私は必死になって探しました！！　そして、発見した時……妻は『魔の森』から出てきたところでした……！！　そして嬉しそうに、私に報告するのです。『森の中にこの赤ん坊が捨てられていた。死んでしまったあの子の代わりに、神様がこの子を遣わしてくれたのかもしれない。だから、この子を私たちの子供だと思って育てましょう』と……！！　ですが！！　信じられますか！？　真冬の夜ですよ！？　どうして、生まれたての赤ん坊が、生きていられるのですか……！　――ましてやあの森は『魔の森』だ。たとえ親が、口減らしのために捨てたのだとしても……。妻が生きている間に発見できる可能性など、どれだけあるのでしょう……？　あの子は、真冬の夜に放り出されて……弱ってすらいなかった……。私たちの死んでしまった子供は……ちょっとした熱で……逝ってしまったのに……。

私は……ルイスは、人ではないのかもしれないと……ずっと……。だから、怖いのです……あの子は、いつか全てを思い出して……魔の森へ帰ってしまうのかもしれない……。そう、思うと……！！」

そう告白するスタンレーの顔は、涙でぐちゃぐちゃになっていた。

ルイスは、ただ。その話を聞くことしかできなかった。

自分は、スタンレーとポーラの実の子供ではなかったという事実。そして、その出生に関する、あまりに不気味なエピソード。スタンレーは、ルイスが化け物かもしれないと思いながら接していたのだろうかと思うと、今まで信じていた全ての想いのやり取りも、空しいものでしかない気がした。

今まで信じてきた全てが覆るという苦痛。それが、ルイスの幼い心を、打ち砕いていた。

「……なるほど。スタンレー・カルヴァート。貴方は話すべきことを全て話した。……今のことは、忘れるがいい」

そんなスタンレーに、アルバートはそう声をかける。

その瞬間、スタンレーの体がかしいだ。こけそうになりながら、何とか体勢を立て直す。

そして、不思議そうに辺りを見回していた。

「あれ……？　私……は。ここは……」

「カルヴァート様。そんなにご心配せずとも、ルイス君は、きっと

見つけますから。私も、心当たりを探してみます」

「あ……ああ。そ、そうですな。私も、探してきますので、それでは」

そして、スタンレーは、そのまま室内に戻っていた。アルバートはそれを見送っていた。

スタンレーの姿が完全に消えると、アルバートは、ルイスの隠れている樹木の影まで歩んでいた。

ルイスは、ただただ視線を茫洋と遊ばせている。

いつも生き生きと輝く瞳に、今は光が消えていた。

「俺は……」

その唇から、かろうじてその言葉が漏れる。

俯くそのおとがいを、アルバートの指が捉えた。そのまま、アルバートが顔を上げさせるのにも、ルイスはなされるがままにされていた。

アルバートの瞳が、金色に輝いてゆく。だが、そんな変化にも、今のルイスは無関心だった。感情のない瞳を、ただむける。

「……一緒に。森へ、来て下さいますね……？」

「うん。……行く」

アルバートの言葉に、ルイスは妙に幼い声音でそう言った。

先ほどは拒絶したそれ。一度ははねのけた術に絡め取られてしまうほど、ルイスの心の中は空虚になっていた。

「――ありがとうございます」

ルイスの快諾に、アルバートはそう言って、地べたに座り込んだままのルイスを立ち上がらせようとするが、ルイスの足には、全く力が入らなかった。

顔から表情をなくし、手足をだらんと投げ出したルイスの人形のような様子に、アルバートはため息をつくと、ルイスを横抱きにした。

普段なら屈辱と感じて嫌がるであろう行為にも、ルイスは何も言わない。

「相変わらず……。貴方はダイアモンドのようですね……。――けして弱くはないはずなのに……一瞬の衝撃で……粉々に砕け散る……。お心強くあれば、貴方は私ごときの術になど、堕ちはしないでしょうに……」

アルバートは、もどかしそうにそう言った。

しかし、その言葉は、ルイスの心に届かない。ルイスにとっては、ただの耳障りな雑音以外の何ものでもなかった。

抱き上げられたルイスの瞳から、一筋の涙が零れ落ちる。

「我が君……」

切なげに囁かれたその言葉も。ルイスには、認識できない、雑音だった。

7．森へ（後書き）

ルイスの出生の秘密編です。
タイトルが『森へ』のわりに、まだ森へは行っていませんが、そろそろ1章の大詰めに入ってきています。

8．リファーズの森

夜の森は、静寂に満ちているわけではない。

風にそよがれる木の葉のこすれ合う音に混じって、虫の音やふくろうの鳴き声がこだましていた。

月明かりすら、木々にさえぎられてしまう漆黒の森の中を、アルバートはルイスを横抱きにしたまま、迷うことなく歩を進めてゆく。アルバートは、樹木の根にうっかりと躓いてしまうような間抜けな姿はさらさなかった。光のささない森の中でも夜目が効くかのように、アルバートの歩調はしっかりとしていた。

ルイスは、アルバートの腕の中で、この魔性の体も温かいのだと、妙なことに感心をしていた。

自分はどうなるのだろうと、ルイスはぼんやりと思う。

この森の中には、先刻アルバートにあれほどの深手を負わせた存在がいることを、ルイスは承知していた。そんなところに、自分を連れて行ってどうなるのだろう。

だが、全てルイスにはどうでもいいことに思えた。

ルイスの無感動な瞳が、茫洋と宙に飛ばされる。その瞳に飛び込んできたのは、ブルーベルの花だった。木々の隙間からこぼれる月の光を浴びて、青の花は、不思議なほどに凛とたたずんでいた。

数日前、ポーラに、ガーデニングを手伝ったお礼としてもらった

花。変わらぬ気持ちを花言葉に持つのだと、ポーラは教えてくれた。たとえ相手がどうなろうと、変わらぬ強い想い。

一緒に花を育てることで、多くの感情を共有してきた。虫に根が食い荒らされて、木が枯れたときは一緒に落胆した。綺麗な花が咲いたときは、一緒に喜んだ。そんな全てまで、嘘だったのか。

（――駄目だ！！　俺はまだ…母さんにも父さんにもまだ、何も聞いてない…！！）

その気持ちが、ルイスの胸の中で爆発する。

ポーラは、森の中で拾った子供をどんな気持ちで育てていたのか。人ではないかもしれない息子が恐ろしくはなかったのか。

スタンレーは、妻が得体の知れない子供を息子として育てるのをどんな気持ちで見ていたのか。ルイスがたしかにそこにあると思っていた、親子としての情は、本当に偽物だったのか。

まだ、ルイスは彼らから何も聞いていなかった。

ルイスは、アルバートの腕の中で暴れる。アルバートについていったら、二度と、帰ることが出来なくなる。その確信があった。

「離せ……！！　俺にはまだ…！　知らなければならないことがある…！！」

そう叫ぶと、ルイスの体の中で何かがうごめいた。そして、それが刃となって、アルバートを切りつけることを、ルイスは確信していた。

ルイスが、アルバートの腕の中から抜け出して、何とか着地をしたとき、アルバートは両の腕を交差させて、守りの姿勢に入っていた。

「…くっ」

その言葉と共に、アルバートの体は、何らかの衝撃を受けたかのように、靴が森の地面をえぐりながら、わずかに滑って止まる。アルバートは、衝撃の去った反動で、前に片膝をつく。そして、その時には、すでにアルバートの前には、ルイスの姿はなかった。

（……帰り道を探さないと…！）

ルイスは、森の中を走りながらそう考えた。

とはいえ、道しるべもない森の中。がむしゃらに駆けるルイスには、どちらが帰り道なのかそれすらも分からなかった。出来るだけ、アルバートが歩んできた方向とは逆の方へ向かっているつもりだったが、もしかして途中で方向がずれているのではないかと、ルイスは不安になる。

森の中で、ルイスは荒く息をつく。村の方角でなくてもいい。せめて、この森から出なければならないと、ルイスは思った。

――その時。

『…ケテ』

どこからともなく、声が響いてきた。

「誰…！？　誰か…いるのか！？」

ルイスは、森の中で叫ぶ。だが、森の中の闇に、全て吸い込まれたように。反応は返ってこなかった。

だが、諦めて歩き出そうとした瞬間。

『助ケテ。――寂シイ。寂シイ…！』

再び、声が響いた。そして、ルイスはようやくそれが、音声的なものではないことに気づいた。脳に直接響くような。そうとしか言い様のない、「声」。

『居ナクナラナイデ。ドウシテ今マデ傍ニ居テクレタノニ…今ハ誰モ居ナイノ』

孤独と寂しさを綴るその「声」に。

ルイスは、何故だか涙を流していた。

その、正体不明の「声」に、なぜかルイスの心が重なっていく。寂しいという、気持ち。

両親に愛されていることは、恵まれていることは十二分に承知しながら、何かが足りないと、ルイスはずっとそう思っていた。その心の隙間と同じものを、その「声」は綴っていた。

痛みと痛みが共鳴してゆく。

「…君は……誰」

ルイスはそう口にした。

言葉ならざる「言葉」を操る存在など、人ならざる存在だと分かっていた。だが、不思議と恐ろしいという気持ちにはならなかった。「声」の方向から感じられる気配は、むしろルイスにとって、とても慕わしいものに思えた。

感じられるのは、とても懐かしい気配。その存在に焦がれるように、ルイスは歩を進めてゆく。

荘厳な何かに導かれるかのように。

そして、森が不意に途切れる。外に出たのだと、ルイスは一瞬そう思った。しかし、すぐにそうではないことは知れる。

森の中に、サークル状になっている広場のようなものが出来ていた。木々が途切れることで、葉にさえぎられることのない月光が、その空間を照らしている。そして、その中央に、果てしない時を重ねたと分かる、オリーブの木があった。

森の中の広間と、その中央に座する、月光に照らされたオリーブの老木。それは、ルイスに、ある種の神聖を思わせた。

神秘的な光景に、ルイスはしばしの間、我を忘れる。そして。

「…君……なの？」

そう、声を漏らしていた。

「君が……泣いてた…の？」

あの「声」の主は、間違いなくこのオリーブだと、ルイスは確信していた。

なぜなら、ルイスが「声」の主に感じた懐かしい雰囲気は、間違いなくこの老木から発せられるものだったからだ。

ルイスは、オリーブの木に近づいてゆく。

返事のように、ざわっと木の葉の音がしていたが、それ以上の反応はなかった。ルイスは、オリーブの木に触れた。――瞬間。

記憶が、流れ込んできた。圧倒的な年月を経た、記憶。

神は数多に存在すると、人間が考えていた時代。自然界のものに神が宿ると人々が信じていた時代。人々が妖精を友とし、自然神を敬っていた時代に。

彼は、「神」だった。

人々は、神木として信仰されていた彼に、日々の生活の感謝を捧げていた。祈りを捧げた。願いを口にした。

最初は、ただの老木でしかなかった彼に、神格を求めたのは人だった。人々の信仰は、集って力となり、彼に神としての力と意思を与えた。

農耕を持って暮らす人々のために、雨を降らせ、病に苦しむ人を救いもした。日々の暮らしが安泰であると、人々は笑っていた。彼は、人々の笑顔が好きだった。

理由などないぐらいに、彼にとって、彼を信仰してくれる人のために力を振るうのは自然なことであた。彼は、人を愛した。

だが。ある時、宣教師を名乗るやからが、この地にやってくる。彼らは、神木をあがめる彼らの信仰を、「邪教」と断じた。やがて、国府の力を持って、村人は信仰を捨てさせられる。

だが、それでも。一部の人々は、かつての信仰を忘れてはいなかった。こっそりと、神木に祈りを捧げに来る人々。

しかしそれすらも、長い年月の中ですたれてゆく。

かつて彼を信じた村人たちは、彼に祈りを捧げる代わりに、教会で祈る。自然界に宿る神を信じる代わりに、唯一の神を信じる。

そして、彼は完全に忘れ去られた存在となる。

そして、彼は消滅しようとしていた。人々の信仰を糧に力を得ていた彼は、信仰なくしては、衰えて消滅するほかに道がなかった。

今生きる人々は、誰も彼を知らない。気づこうともしない。そん

な、孤独の中で彼は消え去ろうとしていた。

――だが、そんなある日、彼は「力」を手に入れた。その強大な力は、元々神木に残っていたささやかな力に惹かれたように、彼の元へやってきた。その力を取り込み、彼は消滅せずにいられるようになったのみならず、かつてと同じように、否、かつて以上の力を得た。

だが、かつてのように、彼に祈る人々はいない。彼に何かを願う人はいない。彼は、今ならほとんどどんな願いでも叶えられると思ったのに、ひどく悲しかった。寂しかった。

彼は、ただ忘れてほしくなかったのだ。

だから、力を得た彼は、自分がここにいることに気づいてほしくて、森を訪れた人々をその力で転ばせる程度の、たわいないいたずらに興じた。

だが、それは村人たちにとっては、未知の恐怖であった。「あの森には悪魔が居る」。もっともらしく、そう言い出したのは誰であったのか。

悪魔がいるのならと、村人たちは、神父に悪魔祓いを頼む。「悪魔」を退散させようと、聖典を読み上げる神父に、彼の悲しみと怒りは最高点に達した。

自分を「悪魔」と断じた人が、彼は憎かった。彼の存在こそは、人々に望まれてこそだというのに。人々の願いを叶え、その平安を守ってきたのは、自分なのに。そんなものを数世代前のことと忘却した彼らは、今度は言葉の石を持って、彼を追い払おうとする。

「悪魔よ、去れ」と。「悪魔」と。「去れ」と…！！

彼の中の感情に呼応するように、強大な力が荒れ狂う。そして、力によって風が生まれる。そして、その真空は。聖典を唱えていた神父を無残に切り裂いた。千々に切り裂かれた神父は、壮絶な死に様をさらしていた。

そして、神父の「悪魔祓い」を見守っていた人々は、恐怖しおののく。

本当に、森には悪魔がいたのだと。神父ですら、悪魔を退散させるどころか、殺されてしまった。人を殺す恐ろしい悪魔！

森へ近寄ってはならないと、村で伝わるのはごく自然なことだった。

人は、正体不明なものに何とか理由をつけたがる。曰く、森には恐ろしい魔族がいる。曰く、森には凶暴な魔獣がいる。曰く、森には犠牲者を待って死霊がさすらっている。

そして、村に数々の「魔の森」の伝説が生まれ、森には誰も近寄らなくなった。

たった、ひとり、彼を残して。ただひたすらに寂しがり屋であった、彼を残して。ただ、寂しい、寂しいと。そう泣き続ける彼だけを。――深い森の中に置き去りにして。

9．聖地と覚醒

気がつくと、ルイスの瞳には涙が溢れていた。

数世紀にわたる、あまりに深くて悲しい、彼の孤独。

「――ごめん。知らなか……！」

そう言うことしか出来ない。

村の人間として。彼のことをすべて忘却していた村人として、ルイスはただひたすらに謝っていた。

「魔の森」の伝説を鵜呑みにしていたわけではない。だが、森の中に何か恐ろしい存在がいる。その伝説から、森に近づかないようにしていたのは自分であった。

教会で祈り、昔の信仰など知りもしなかったのは、自分であった。

その事実が、ルイスにはひどく悲しい。

忘れ去られるという悲しみが、自分のことのようにルイスには流れ込んでくる。

「…もう。忘れないから。俺が…知っているから！」

彼が、神であったことを。こんなにも人を求め続けている悲しい神であることを。

『…誰カ。タッタヒトリデモイイ。――知ッテ。知ッテイテ欲シカッタダケナンダ。タダ僕ハ。忘レテ欲シク無カッタダケ――』

「うん…、うん……！　忘れない…！」

ルイスは、必死にそう言い募る。

全ての人から忘れ去られるという悲しみは、どのようなものだろう。たったひとりで、森に取り残された長い時間、彼は何を思っただろう。

『…アリガトウ。僕ハ、ソレダケデイイカラ。君ニ、返スヨ。全部――』

ルイスは、表情などあるはずもないオリーブの老木が、少しだけ微笑んだ気がした。しかし、彼の言っていることが分からずに困惑する。

「『返す』…？　何を……」

『スグニ分カッタヨ、君ガ、本来ノ、コノ“力”ノ持チ主ダッテ――。君ガ覚エテイテクレルノナラ、僕ニハモウイラナイカラ…。今マデ、僕ニ“力”ヲクレテ…アリガトウ…』

何を言っているのだろうと思う気持ちとは別に、ルイスの口から勝手に言葉が飛び出す。

「駄目だ……！！　それを手放したら、君の寿命は……！！」

本能が、「彼が力を手放せば、彼は時期に死んでしまう」と告げていた。長い時を生きてきた彼。だが、彼の寿命はすでに尽きていた。だが、彼が手にした「力」によって、彼は今日まで生きながらえてきたのだ。

それを、彼は手放そうとしている。

『モウイインダ。――君ガ僕ヲ覚エテクレテイル…。僕ガ死ンデシマウコトヲ、悲シンデクレル人ガ…ヒトリデモイル…。ソレダケデ――』

「やめ…っ！」

それでもなお制止しようとしたルイスは、流れ込んでくる圧倒的な力と、記憶に、目を見開いた。

――白刃がきらめく。自らの胸に突き刺さったそれ。

衝撃に、地に倒れ伏した。自らの体を浸す、生暖かいそれが、自ら流した血だと分かっていた。

だが、それに彼は無関心だった。

もう、どうでもいい。その絶望の言葉が、彼の胸を締めていた。今際の際で、彼が感じたのは、ただ、絶望だった。果てのない、絶望だった。

だが、ふいに。自分にはやり残したことがあることに気づく。せめて、それを確認するまでは死ねないと。そう、思った。

『――死……ね……ぬ……！　……は……まだ！　まだ……！！』

しかし、肉体は滅しようとしている。普通の傷で、死ぬことなどないほどに強大な力を有いている己でも、この身を貫くのが、破魔の力を有するこの聖剣であるのなら話は別だった。

魔力を討ち滅ぼされる苦痛に、体が痙攣する。

逃げなければ。この力から逃げなければ、この肉体は塵に還ってしまう。

そして、最後の手段。彼の強大な力と記憶が、分裂して散ってゆく。そして、全ての力を手放して、彼はわずかな魔力と、魂だけで逃げ出したのだった。

――どれだけの時が経っただろう。記憶をなくした感覚だけの存在は、聖域でまどろんでいた。永遠の安らぎであると同時に、永遠の孤独の時。停滞と無変化の時。

だが、そのまどろみを破る者がいる。魔の森の伝説をものともせずに、森へ侵入してきた怖いもの知らず。

心だけの存在となっていた自分は、その「望み」に反応する。子供を失った母親の痛み。小さなぬくもりがほしいと、それを願うその望みに。

気づくと、自分は彼女の意志で、肉体を得ていた。産声のような

泣き声が、形成されたばかりの声帯から漏れる。

『赤ちゃん？　どこにいるの？　赤ちゃん！？』

必死に探すのは、若き日のポーラ。

失った子供はもう帰ってこないのだと分かっている。それでも、寂しさに耐えられなかった、弱くて優しい女。

優しい「母親」の腕に抱きしめられて。自分は、「ルイス・カルヴァート」になった。

「ああ…そうだ。俺は…人じゃ…人ではなかった…」

ルイスは、そう呟いた。

だが、その後、体を襲う異常な痛みに、ルイスは地面に座り込む。

「ぐ……ぅ……！　い……たい……！」

そう言うのと同時に、ルイスの肉体は急激に変化していた。

めきめきと音がしそうなほどに急激に身長が伸びてゆく。肉体の成長に耐えられなくなった服が、びりびりと音を立てながら、破れていく。

気づくと、ルイスは半裸に近い格好で、座り込んでいた。ルイス

は、自分の手を見つめる。それは、本来のものよりも、大きい。自分が、本来の姿に戻ったのだと、ルイスは確信した。

オリーブの木を見上げると、満開の花が咲いていた。無数な小さな白い花びらが、霞のように、オリーブの老木を埋めていた。これは、先ほどまではなかったものだ。「彼」が。消滅する間際の「彼」が、最後の力で咲かせたものであった。

狂い咲きの花は、息が止まりそうなほどの幻想的な美しさをもって、月明かりの下に浮かび上がっていた。

もう、目の前のオリーブの老木に、「彼」の人格は宿っていないとルイスは確信していた。精霊を失った老木は、近いうちに朽ちて枯れるのが定めであろう。

呆然と座り込むルイスの肩に、何かがかけられた。それは、裾の長い上着だった。

「ご帰還。お待ち申し上げておりました……。――ルドヴィクス様」

それは、アルバートの声だった。

アルバートは、地面に片膝をついて、胸に手を置いていた。それは、まるで宮廷での騎士の作法のようであった。上位の相手に忠誠を誓うような、そんな所作。

アルバートの瞳は、金色だ。だがしかし、その瞳がもはやルイスには怖くはない。

知ってしまったからだ。自分も彼と同じように、人ならざるもの

だと。異形の存在であることを。

アルバートが口にした、古めかしい響きを持つ名前が、自らの真の名であると、ルイスは確信していた。

ルイスは、いや、ルドヴィクスは、上着に袖を通すと立ち上がる。そして、アルバートを見つめた。

「未だに……思い出せない。俺は、何者なんだ……！　そしてお前は……俺の、何なんだ……」

「……御身のことは、御自身で思い出されるがよいでしょう。――私は、貴方に仕える者でございます」

「――お前の真実の名前は。アルバート・ヘストンとは、偽名だろう？」

ルドヴィクスのその問いに、アルバートは、ひどく切なそうに微笑んだ。その笑みに、一瞬ルドヴィクスの瞳は釘付けになる。

「――アルベルトゥスと申します」

「アルベルトゥス。――俺は、これからどうすればいい？」

従者と名乗ったその青年に、ルドヴィクスは困惑を隠しきれない声音でそう言った。

思い出せた記憶は、あまりに少ない。自らが人ならざる存在であることは思いだせても、それならば、自分は何であるのか、は未だに分からなかった。

「貴方に仕える者」と自らを説明したアルベルトゥスのことも、ルドヴィクスはまだ思いだせない。彼が何ゆえ、このようにルドヴィクスに膝をつくのか。おそらく、ルドヴィクスの思い出せない記憶の中にその答えがあるのだろう。

そして、思い出せない記憶の中に、ひとつだけ慕わしい面影があった。亜麻色の髪に、鮮やかな緑色の瞳を持った少年。彼が誰なのか、ルドヴィクスには分からなくなった。だが、彼のことを思い出すと、ルドヴィクスの胸は、針でつつかれたように痛む。そして、ひどく慕わしい気持ちが湧き上がってくる。

しかし、そんな彼ですら、誰なのか分からなかった。大切な存在だったはずなのに、名前すら思い出せない。

そして、今際に、何かを強く願ったはずなのに。何がゆえに、記憶を手放してまで死ぬことができないと思ったのか、ルドヴィクスはどうしても思い出せなかった。

そんな断片的な記憶しかないのに、何をすればいいのか、ルドヴィクスは困惑する。

「ルドヴィクス様はどうされたいと望まれますか……？」

しかし、質問に質問で返されて、ルイスは忌々しくなる。それを訪ねたいのは自分だというのに。ルドヴィクスは、「ルイス・カルヴァート」という存在として、間違いなく幸せだった。それをあのような、スタンレーへの詰問という形で、知らずともよかった真実をさらし、その上、自らが人ならざる存在であったという真実を見せたのはお前だろうと言いたくもなる。

「――分からない……。俺は……死の間際……確かに何かを望んだ……。それが……どうしても思い出せない……！！　思い出せないんだ！！」

ルドヴィクスは、そう言って、手で黒髪を握りつぶす。

「違う……。それは『俺』じゃない……！！　俺は、母さんと、父さんに真実を聞かないと……。でも……」

そう言って、ルドヴィクスは、自らの手を再び眺める。立ち上がったこの状態だと、よく分かる。地面までの距離が、先ほどまでよりもとても遠い。何歳ぐらいの外見になっているのか、今のルドヴィクスには分からなかった。だが、少なくとも今の自分は１０歳には見えないだろうということはルドヴィクスには分かっていた。

「――忠言、お許しください。……ルドヴィクス様の御復活は、いずれ知れ魔界に渡りましょう。……そうなれば、御身に徒なそうと、刺客が徒党を組んで押し寄せるでしょう。ルドヴィクスの御ためとあらば、私も御身をお守りいたしますが、魔族が攻め入ってくれば、確実に……あの村は焦土となりましょう」

ルドヴィクスは、アルベルトゥスの言い草に激昂した。

「お前は……！！　それでは、俺の選択肢なんてあってないようなものだろう！！　――戻れるはずがない！」

「――いいえ。あります。あの村を焦土と変じさせても、留まることもできないわけではないのですから」

「ふざけるな……！　そんな言葉遊びが……！！」

アルベルトゥスを、ルドヴィクスの怒りの波動が襲う。ふと房程度の銀髪が宙に舞い、長い銀色の髪を結っていた紐が切れて、滝のように豊かな髪が、背に流れる。そして、切り裂かれた頬からは血が流れる。自分の激情に力が暴走したことを知り、ルドヴィクスは、必死で己を律した。

だが、アルベルトゥスへの怒りは収まらなかった。

それなのに、アルベルトゥスは淡々とした口調で言葉をつむぐのを止めはしない。

「言葉遊びとお思いですか。ですが、事実の正確な把握は必要なことかと愚考申し上げます。――ルドヴィクス様。貴方には選択肢がある。その中のいくつかは、貴方にとって、選ぶことのできない選択肢でしょう。ですが、それを『選べない』と思うのが、すでに選択です。それを御誤りになりませぬよう――」

不愉快極まりない言葉に、ルドヴィクスは奥歯をかみ締めて耐える。

アルベルトゥスの言葉は不愉快だが、だからといって八つ当たりのように力を暴走させるなど、ルドヴィクスの美意識と矜持が許さない。

だから、ルドヴィクスはため息に怒りを逃がすと、改めてアルベルトゥスに問うた。

「俺は、死の間際……何かを望んだ。……お前はその望みを知って

いるのか……？」

ルドヴィクスの言葉に、アルベルトゥスは首を振る。

「申し訳ございませんが、存じ上げません」

「信じられないな」

この男は情報を出し惜しみしているのではないかと、ルドヴィクスは冷たく睨めつけた。

「――私は、貴方にだけは嘘を申し上げません」

「……白々しいな」

ルドヴィクスは、アルベルトゥスの言葉を鼻で笑った。

散々、嘘をついて接近してきたのはどこのどいつだと言いたかったのだ。

「いいえ。結果的にルドヴィクス様が誤解されたことはございましたが、私がルドヴィクス様に嘘を申し上げたことはございません」

それに、アルベルトゥスはぬけぬけとそう言う。

それに、ルドヴィクスの中で、最初の出会いのときの会話が思い出される。スタンレーに、紹介された名前。たしかに、アルベルトゥスは、直接ルドヴィクスに、アルバート・ヘストンだと名乗ったわけではない。それ以外にも、思い起こしてみれば、アルベルトゥスが明らかに嘘をついたと思われる事柄は、人づてに聞いていた。

アルベルトゥスの力を知った今では、マライアが紹介状を書いた理由も理解できていた。術に絡め取られて、己の意思に反して書いたというのが、おそらく真実だろう。

それは、目の前の美貌の魔性がいかにも取りそうな手段に思えた。

「……ひとつ分かったことがある」

「何でしょう」

「お前は信用ならない」

そう言って、ルドヴィクスは冷たく笑ってみせた。

強烈な怒りは、すでに燃え上がる炎から、凍てついたものにまで変じていた。

なるほど。たしかに嘘はついていないのだろう。だが、そのような絡め手で結局騙してくるほうが、よほど性質が悪いではないか。

ルドヴィクスは、従者を自称するこの青年を、全く信用ならないものとして、認識した。

そして、今のルドヴィクスは、凍てついたような笑みが、どれほど凄絶に美しいのか理解していなかった。

今のルドヴィクスは、人間に例えるのなら、１７歳前後に見える。だが、ルドヴィクスの見た目は、ルイスであった時から、見た目の年齢以外は、それほど劇的に変化しているわけではない。琥珀色だ

った瞳は、魔性の証のように、金色に色づいていた。だが、全体の目鼻立ちとしては、あの少年の面影がたしかにある。

だが、それと同時に、あの少年が成長しただけで、これほどまでに劇的に変化するはずがないという評価もまた出てくるだろう。ルイス・カルヴァートという少年は、確かにそれなりの造作を持っていた。だが、それは平均よりも少し顔立ちが整っている程度のものだった。

だが、このルドヴィクスという少年の姿をした魔性は、あまりに美しい。漆黒の髪は、月明かりに凄絶に映え、白い肌に、金色に輝く瞳。

アルベルトゥスの美貌が、月のように幻想的なそれなら、ルドヴィクスの美貌は、太陽のように印象的で鮮やかだ。アルベルトゥスの美を繊細な彫刻に例えるべきなら、ルドヴィクスの美は鮮やかな色彩で描かれた最高の絵画。

人ならざるものを思わせるほどの美という点では共通しながらも、アルベルトゥスの美貌が、偶然目に入った瞬間に見ほれるそれなら、ルドヴィクスのそれは、どんなに離れていても、人の目を強引にわしづかみにして離さないようなところがあった。

アルベルトゥスもまた、そんな主の美貌に見惚れる。

「…御賢明ですね」

そして、そう言って、微笑むのだった。

それにルドヴィクスは、少しだけ顔をしかめると、歩みだした。

「…行くぞ。――お前が俺の従者ならば、ついてくるがいい」

だが、少し歩んで後ろを振り返る。

「――すまないな。我が力、たしかに返してもらった。……約束は守るから。――お前の存在を……生涯、忘れない……」

ルドヴィクスがそう声をかけた相手は、アルベルトゥスではなかった。それは、寂しがり屋の、かつての神へ。

改めて見る老木は、やはり荘厳なほどに美しかった。

「……見事だな」

純粋な感嘆を込めて、ルドヴィクスはそう言う。

おそらく、もうこのオリーブの木は、来年の花を咲かせることはないだろう。彼は、来年の春を待たずに逝ってしまうのだろう。

しかし、それはとうの昔に訪れるはずであった運命であり、ルドヴィクスの力がゆがめてしまった運命だった。

その感嘆を最後に、ルドヴィクスは切なさと共に、オリーブの老木に背を向けた。

忘れ去られるもの。時の中に置き去りにされる存在。

人の命はあまりに短く、伝えられるものも、時の中で形を変えて、時に全て消滅してしまう。

だが、ルドヴィクスは、彼がかつて神であったことを知った。そして、魔族としての命尽きるまで、忘れはしないだろう。寂しがり屋の彼のことを。この満開の花の、幻想的な美しさと共に。

9．聖地と覚醒（後書き）

さて、皆様にとって、意外な展開にできたでしょうか…？

1章の意味を簡単に言うのなら、ルドヴィクス覚醒物語でした。ここのネタバレをしないようにシリーズ説明を書くのがどれだけ大変だったか（笑）↑

というか、せっかく、ルイスやアルバートの名前に親しんで下さっていた方はごめんなさい。ルドヴィクス、アルベルトゥス、というのが彼らの正式な名前になります。

というか、ルドヴィクス様、覚醒したとたんに偉そうですね！↑

いやまあ、もともとのキャラが〇〇だから仕方がない。元々はさらに×××です。まだ完全に覚醒しきってないので、ルイス君の穏やかな性質と中和されてこれです、このお方。

純粋無垢モードのルイス君も書き納めだと思うと少し寂しいです（ほろり）。とはいっても、まだルイス君の人格のほうが支配的でしょうが。詳しいことは、次話にて。

１０．真実の絆

スタンレーは、暗鬱とした気持ちで、夜遅い時刻を指し示す時計を見た。

ルイスは、まだ帰ってこなかった。

彼は魔の森へ行ったのではないかと、そんな不安が消せなかった。探しに行ったはずの、アルバートとも連絡が絶えている。その、極度の不安感の中で、スタンレーは一刻も早く森を探すべきなのではないかと、そう思った。

だが、探すのに協力してもらっている村人や使用人は、そろいもそろって、森にいるわけがないから、他の場所を探そうとの一点張りだった。

スタンレーには分かっていた。皆、怖いのだ。ルイスを探すために、森の中になど行きたくはないのだ。

スタンレーは、ベッドに伏している妻を見る。ポーラは、気も狂いそうなほどに心配して、ついに失神してしまった。スタンレーは、この歳になっても真っ直ぐに妻を愛していた。だから、こんな時には傍にいてやりたかった。

だが、スタンレーは、決心をして立ち上がる。妻の面倒を誰かに頼み、自分はルイスを探しに行こうと思ったのである。

そんなおり、不意に部屋の扉が開かれた。ノックなしの無礼は、多少不快には思ったが、スタンレーは鷹揚にそれを許すつもりで、

振り向いた。

そして、そこにあった美貌に、固まる。

夜を閉じ込めたような髪の色はつやつやと美しく、琥珀色の瞳は、本物の宝石のようにきらめいている。肌は白磁のように白く、しみひとつない。17歳前後ほどに見える青年は、今まで見たこともないほどの美貌の持ち主だった。いや、美貌という点では、先日雇い入れたアルバートも負けてはいないだろう。だが、アルバートの美には、ここまで壮絶な凄みは存在しなかった。

魂を鷲づかみにするような美貌というものがこの世にあることを、スタンレーは初めて知った。これは、人ならざるものだと、スタンレーは本能で直感した。

だが、それと同時に。彼が、ルイスであることも、スタンレーは親として、直感的に悟っていた。ルイスは、顔立ちは整っていたほうだ。エキゾチックな黒髪が白い肌に映え、印象的な容姿をしていた。しかし、「美貌」という言葉がしっくりくるほどに美しかったわけではない。

愛らしい顔立ちをした子供。だが、それはあくまで平均よりも少しばかり整っている、という程度である。畏怖すら感じるほどに美しかったかと問われれば、否だ。黒髪に琥珀色の瞳という珍しい色彩が一致するからといって、自分たちが愛情を込めて育ててきた子供と、目の前の17歳の青年を結びつけるのは難しい。だがそれでも、スタンレーは彼がルイスであることを疑わなかった。

そして、時が来たのだと。恐れていた時がきたのだと、状況も分からぬままに、スタンレーは確信していた。

スタンレーは、御伽噺を思い出す。子供と夫を残し、天に帰ってゆく天人の話を。スタンレーがその話を読んだのは、子供の頃だった。美しい挿絵つきの絵本だった。それはスタンレーの妹のものだったのだが、天へ帰ってゆく天人の絵のあまりの美しさに、スタンレーは惹き付けられたのだった。

だが、今目の前にいる青年は。その挿絵に描かれていた、至上の美女よりも美しい。

「…お帰り……ルイス…」

だが、お前が帰ってくる場所はここなのだと、そう告げたくて、スタンレーはそう言って笑った。いつものように。

それに、ルイスの肩が揺れる。美しい顔に、動揺の光が灯る。

「駄目じゃないか。ルイス。心配したんだぞ…母さんだって…」

努めて、スタンレーはいつものとおりに振舞う。

もしも、ルイスの変化を指摘したら。日常が崩れてしまえば、ルイスがいなくなってしまう気がした。あの、絵本の天人のように。遠いどこかへ、帰ってしまう気がした。

「と…うさん……。俺は…ここに帰ってきても…いいの？」

「何を言っているんだ。ここはお前の家じゃないか」

おそるおそるルイスの唇から漏れた言葉に、スタンレーは力強く

そう言った。

「でも…俺は貴方たちの本当の息子じゃ」

「息子だ」

ルイスの言葉に、スタンレーはきっぱりとそう言った。それに、ルイスがはっとしたように顔をあげる。

「お前はきっと真実を知ったのだろう。たしかに…お前は私たちとは血がつながっていない。――お前が……人ならざるものかもしれないと、ずっと思っていた。だけど、そんなことが、なんだ。私はお前の父親だ……。ずっと……私たちは、お前の成長を見守ってきたのだぞ……？」

優しくそう言いながら、スタンレーは思い出していた。今日までの日々を。

スタンレーは、到底赤子が生きていられるとは思えない森から、ポーラが拾ってきた子供を恐ろしいと感じた。だが、その恐ろしい子供が。スタンレーを見て、微笑んだのだ。とても可愛らしく。

ただ、それだけ。だが、無邪気で無力な赤子を怖がり続けることも、憎むこともできなかった。

ルイスと名づけた子供をポーラから引き離したら、取り返しのつかないことになりそうで。抜け殻のようになっていたポーラが明るい笑顔を取り戻したのは、ルイスのおかげだということは分かっていた。

だからこそ。黙認するしかなかった。――ただ、それだけのはずだったのに。

だが、少しずつ育っていく子供を。こちらを見て、何も知らずに微笑む赤子を。

どうして、心動かさずにいられるだろうか。どうして、無邪気に慕う気持ちを無下にできるだろうか。どうして。愛さずに、いられるだろうか。

そして、親子になったのだ。血の繋がりではない。ただ、育んできた時間が、自分たちを親子にした。

離乳食を食べるルイス。テーブルの上やよだれかけにこぼした汚れを、困ったようにぬぐいながらも、本当はとても幸せそうな顔をしているポーラを、スタンレーは見つめていた。

歩くことに挑戦しだしたルイス。不安定な足取りで、スタンレーの元へ歩いてこようとして、こけてしまったルイスを、スタンレーは優しく抱き上げた。

つたない言語を操りながら、必死に話そうとするルイス。話に聞いた言語能力の発育よりも大分早かったから、もしかしたらこの子は天才かもしれないと、ポーラと2人で盛り上がったこともあった。

文字を覚えるルイス。お世辞にも綺麗とはいえない文字だったが、初めてルイスが自分の名前を文字で書いたのを見たときは、胸が熱くなった。その紙は、今でも書斎の奥に大事にしまっている。

近所の子供たちと無邪気に遊ぶルイス。窓から見守っていると、

ルイスは転んでしまって。膝をすりむいたらしかったけれど、泣かなかったルイスを誇らしく思った。

ポーラのガーデニングの手伝いをしているルイス。愛しい妻と、可愛くも優しい息子がいる暖かい家庭。男として、これ以上に幸せなことがあるだろうかと本気で思った。

『ルイス様は大変聡明でいらっしゃって、1度説明したことは忘れないばかりか、それを応用して考える能力をお持ちです。また、才能に溺れて努力を怠ることもありません。お世辞ではなく、大変素晴らしいと思いますわ。将来はひとかどの人物になられるでしょう』。そう、家庭教師のマライアに感嘆を込めて評価されたことは、自分のこと以上に誇らしかった。自分たちの自慢の息子なのだ。当たり前だろうと。そんな親馬鹿な言葉をこらえるのに、ひどく苦労した。

そんな全ての時間が、自分たちを親子にしたのだ。それを、ルイスに分かってほしかった。分かってくれるはずだと、そう思った。

「――父、さん。貴方を…そう呼んでもいいんですね…」

「ああ。ルイス…」

スタンレーは、目頭が熱くなるのを感じていた。伝わったのだと、思った。

「……ありがとう……。俺は、貴方たちの息子として……幸せだった……。――でも。ごめんなさい……！　俺は……」

意識が途切れる寸前、スタンレーが見たのは、黄金の瞳だった。

神々しいほどに美しい、黄金色の、瞳だった。その瞳から、一筋の涙がこぼれるのを見たのが、彼の最後の意識だった。

ルドヴィクスは、意識を失ったスタンレーの体を、抱き起こしていた。まだルヴィクスには、力を相手の意識にぶつけることで、意識を飛ばさせるような、乱暴なやりかたしかできない。

その美しい頬には、涙がとめどなく流れている。

「アルベルトゥス。――2人から……いや、この村の皆から。俺の記憶を……消せ。俺がいなくなっても悲しまないように。……万が一でも、俺の事情に巻きこまないように……！　たしか……そんな術があったはずだ……。お前なら出来るだろう？」

「――よろしいのですか。ルドヴィクス様」

「俺がいればこの村を巻き込むと言ったのはお前だ！！　俺は……っ！　なぜ俺を覚醒させた！！　俺が何も思い出さなければ、人のままでいられたら、俺は……！！」

激情を、ルドヴィクスはアルベルトゥスにぶつける。

たとえ捨て子でも、スタンレーたちが与えてくれた愛情は本物だった。もし、ルドヴィクスが人であったなら、たとえ真実に衝撃を受けたとしても、受け入れてお互いに愛情を認められただろう。そう、間違いなく、彼らとルドヴィクスは親子だったのだから。

思わず力を暴走させそうになって、ルドヴィクスは深呼吸をした。

気に食わないからといって、力にたよって当り散らすような無様を嫌ったのである。

取り戻したばかりの力は、ルドヴィクスにとっては暴れ馬にも似て、コントロールが難しい。人知を超えた強大な力が、己の中で荒れ狂っているのを、ルドヴィクスは感じる。これが、元々の力の数分の1だというのだ。もともとの己とは、どのような存在だったのかを考えると、ルドヴィクスは恐怖すら感じた。

「…お気を強く持たれてください。貴方がご自身をしっかり持ってらっしゃる限り…力が暴走することはありません。それはそもそも、貴方の一部なのですから。怒りを感じるのを悪いとは言いません。…ですが、それに囚われぬよう。私を罰したいのであれば、怒りに踊らされるのではなく、貴方御自信の意志でなさってください…。でなければ、ルドヴィクス様。貴方は、力を支配するのではなく、力に支配されてしまわれます。…そのようなこと。御矜持がお許しになりませんでしょう？」

「……アルベルトゥス……！　お前の言葉……。正論であることは否定しない。だが……お前の言葉は俺の気に触る……！！　――控えろ！」

「――御意」

ルドヴィクスが苛立ったように言うと、アルベルトゥスが頭を下げた。

そんな芝居がかった動作にですら怒りを感じるが、ルドヴィクス

は、それを冷静に抑える。

頭を振ると、アルベルトゥスの存在をないものとして無視をする。

ルドヴィクスの腕力では、立派な体躯をしているスタンレーを抱き上げるのは難しかったが、力をコントロールして、運ぶ。長椅子に彼を横たえると、ルイスは最後にスタンレーと、次いでポーラの顔を覗きこんだ。

「さよなら…。……ありがとう。貴方たちは、たしかに。俺の、親だった。俺は、人じゃないかもしれないけど……。もしかしたら邪悪な存在なのかもしれないけど……。貴方たちに与えてもらったものは、忘れないから……」

ルドヴィクスは、オリーブの木を思い出す。忘れないでと、それだけを願っていた孤独な存在。

今なら、その気持ちが先ほど以上に分かると、ルドヴィクスは思った。

忘れてほしくない、自分の存在を、無かったことにしてほしくない。それでも。

「アルベルトゥス……。命令の変更はしない……。俺が関わった人間、全員の記憶を改ざんしろ。ルイス・カルヴァートなんて存在……最初からいなかった。――存在しなかったんだ…」

「……」

「アルベルトゥス？」

「……了解、いたしました。ルドヴィクス様」

「……俺は、幸せだったんだ……」

ルドヴィクスは、唐突にそう言った。

従者だと言われても、アルベルトゥスは正直、いけ好かない相手だ。だが、今はこの相手しか話す相手がいない。

「俺は……ずっと。１０年間。幸せだった……」

「……」

「さっきは……」

言いかけて、ルドヴィクスは、唇をかみ締める。言いたくなかった。だが、言わないのは、あまりに卑怯で愚かだ。

「……さっきは、すまなかった。……お前の言葉は正しい。俺が……この１０年間を信じていられれば……疑うことなく信じられれば……俺はお前の術にはかからなかった……。そうだろう？　たとえ俺が捨て子だと知っても、挙句、人間ではないかもしれないと知っても……それでも受け入れてくれる人がいると信じられれば……！　俺が事実ひとつで真実を見誤るほどに愚かでなければ！！　俺は……失わずにすんだ……！」

自らが愚かだったと、ルドヴィクスは認める。

１度は振り切ったアルベルトゥスの術に絡め取られたのは、ルド

ヴィクスの心の弱さゆえだった。

自分が化け物かもしれないと、そう思った。たったそれだけで、今まで与えられた全てが信じられなくなった。

「――俺は……いつもいつも、遅すぎる……！」

そう叫んで、ルドヴィクスははっとした。

一体、何を指しているのか、自分でも分からなかったのだ。だが、こんな痛みを。前にも経験をしたことがある気がした。

思い出したいのに、思い出せない。そのもどかしさが、ルドヴィクスを苛む。

「ルドヴィクス様…」

「――アルベルトゥス。俺の力と記憶は、まだいくつかあったはず……。俺は死の間際……7つに。そう、7つに分けた。――そう、昔から魔術において、もっとも安定した数字は7……。正しく、7……。ひとつは、我が友となった『彼』から返してもらった。だから、残るは6つのはず……。どこにある……」

ルドヴィクスは、打って変わって、冷静な声音でそう言った。

思い出せないのだ。

人として、ルイス・カルヴァートという少年として果たしたかった願いは、もはや遠すぎる。ならば、ルドヴィクスとして、望みを叶えるしかないではないか。

でも、存在ですら人の願いがなければ保てないほどにあやふやな存在に堕してまで、果たしたかった自分の願いが、ルドヴィクスには未だに重いだせないでいた。その事実が、苛立ちと焦りに変じる。

「……私には、それを判じる能力はありません。……ですが、ルドヴィクス様が力を手放されたは、97年前……。その時期から、顕著となった力を辿ってゆけば、答えにたどり着くことと愚考申し上げます。――ルドヴィクス様の御力は、どのようなものに宿っているかは予想できません。……神木に宿ったがごとく、人にも、獣にも、魔族にも。宝石であろうと、剣であろうと、宿る可能性はございます。とはいえ、力は力に惹かれるものですから、元々ある一定以上の力を持ったものにしか宿りはしませぬでしょうが」

「……自らの力を取り戻すだけが、とんだ宝探しだな」

ルドヴィクスは、皮肉に口元を歪ませる。

だが、歩き出す。ルドヴィクスとして。まごうこと無く、彼の家だった屋敷を出てゆくために。

「結局俺は……あの人たちに、何も返せなかったな……」

1階に来て、瞳に飛び込んでくるのは、ポーラと過ごした庭園。あそこで、一緒に手入れをしていたのが、つい1日前のことだなんて、ルドヴィクスには信じられなかった。あの頃とは、何もかもが変わってしまった。

自らが人間だと信じていた頃、疑問もなく、スタンレーの跡を継ぐのだと信じていた。カルヴァート商会を、今以上に発展させるの

だと。

下層階級に出回っている、粗悪な茶。だが、もっと良質な茶を安価で仕入れる方法を見出せば、それは多大な利益となるのではないだろうか。この国は、これから今以上に富む。それは、嗜好品をもっと一般市民が楽しめる時代の到来を意味する。それを視点に入れた、商業の拡大を。

そんな、未来の白地図を、描いていた。

だが、そんな夢は今となっては、かなわぬ夢でしかない。散々世話になり、溢れるほどの愛情を与えられながら、こんな風に恩を徒で返すようなまねしかできない。

思い出すら奪ってしまうなんて、それがどんなに傲慢なことなのか、ルドヴィクスには分かっている。だが、突如として行方不明になったひとり息子という心の傷を作るよりは、そちらのほうがよほどましではないかと。

ルドヴィクスは、ただ不器用にそう思った。

「……ルドヴィクス様。これを」

そんなルドヴィクスに与えられたのは、一粒のオリーブの実だった。

「これは……」

「満開の花の中に、たったひとつだけ……。――あの存在ではありませんが。元々神木としてたたえられたものの末裔。一家の繁栄の

守護の役割ぐらいは果たすでしょう」

ルドヴィクスは、秀麗な顔に複雑な色をにじませながら、その実を見つめた。

忘れないでと、それだけを願っていた彼の想い。忘れないでという悲鳴のような想いは、自らのものとも重なって、ただひたすらに、切なかった。

１０．真実の絆（後書き）

実はこのシリーズは、１章自体が、この「はじまり」にたどり着くためのものでもありました。

さて、「アルバートが家庭教師になることを希望した理由は」と、「魔の森とは何なのか」という謎が解けたわけですが、その代わりに沢山の謎が出来てしまいました。「ルドヴィクスとは何ものなのか」、「アルベルトゥスが仕える理由は」、「亜麻色の髪の少年は何ものなのか」、「９７年前にルドヴィクスが瀕死の状態に追い込まれた理由は」ｅｔｃ．．．

これらの謎の秘密は、ルドヴィクスが力と共に手放した記憶に眠っています。それを取り戻すのが、このシリーズの今後の課題となります。

１１．なくした記憶

「ねえ、貴方。そろそろオリーブが実を結びそうなの」

スタンレーは、上機嫌でそう言うポーラを、幸せな気持ちで見つめていた。ポーラは、すでに３０代とは思えないほどに、少女じみた容姿をしている。それを、未だに愛らしいと思うのだ。

スタンレーは、珍しいほどの愛妻家だった。ポーラが１度流産してしまった後、それが悪かったのか、子供には恵まれなかったが、それでも愛しい妻がいるだけで、カルヴァート家は幸せな家庭であると、彼は信じていた。

跡継ぎ問題はないわけではなかったが、弟夫婦の子供が５人もいるので、いざとなれば養子をもらうという手もある。実際、色々と心配をしてくれている弟夫婦からはそのような話がきているのだが、スタンレーはどうしてだかその問題を先送りにしてしまう。

まだ、子供を得る気にはなれないのだ。

「でも、不思議よね。野の花なら、自然と根付くということもあるでしょうけれど、オリーブが気づかないうちに根付くなんて、あまりない話だって、ジェイミーさんも言っていたわ」

オリーブという言葉に、スタンレーは、東のリファーズの森を思い出す。最近、村から出てきた古文書から、東の森が、昔は聖地だったことが明らかになったのだ。

数百年前、この地では異端狩りが横行していた。異教的なものは徹底的に排除され、魔女裁判で多くの人間が犠牲になったという。

「魔の森」の伝説は、その時代に出来た捏造なのではないかと、村ではそう囁かれるようになった。少しでも、異教的なものを貶めるための、教会による捏造。

芸術的な視点から、古代のものが見直されている今の時代、その古代の宗教は、一部の人間のロマンを煽ったようだった。村の無謀な若者のひとりが、怖いもの知らずにも、「魔の森」に足を踏み入れたところ、無事に生還したばかりか、美しい場所だったと伝えてきたのだ。その若者によると、森の奥には、枯れたオリーブの木があるだという。枯れ果てた木だが、どこか荘厳で神聖さを感じたと。

おかげで、今では村人はすっかりリファーズの森を、魔の森と呼ぶことはなくなっていた。

それが、スタンレーには、複雑だった。あの森を忌まわしいとは思っていなかったが、あの森のことを考えると、何故だかとても切なくなったから。

「貴方？」

物思いに沈むスタンレーを咎めるように、ポーラはそう言う。それに、スタンレーははっとなって返事をした。

「そうか…。だが、まだ実はなってないのだろう？　それでオリーブかどうかなど分かるのか？」

スタンレーがそう言うと、ポーラは笑う。それは、スタンレーの無知を笑うものだったが、嘲笑ではなく、ただ純粋におかしいと思っているだけの笑いだったから、スタンレーは不快にはならない。

「貴方ったら。実を実らせないと、何の木か分からないと思ってらっしゃるの？　殿方ってこうなのかしら。同じ木でも、幹や葉の感じがそれぞれ違うのよ。たしかに判別が難しいものもあるけれど…それに、今花が咲いているから、オリーブだというのは間違いないわ」

「オリーブの花…というのはどういうものだったかな……」

「白い花よ…。というか、説明するよりも見たほう早いんじゃないかしら」

ポーラは、そう言うと、スタンレーをともなって、庭園に歩を進める。

スタンレーは無骨な男なので、花のことなどさっぱり分からなかったが、それの手入れをしているときのポーラが生き生きしているというそれだけが、スタンレーは嬉しかった。

普段は眺めるだけであまり足を踏み入れることのない庭園に足を踏み入れると、色とりどりの花が、スタンレーを出迎えてくれた。

美しい花々の中で、こんな世界に生きているから、どこかポーラの足取りは妖精じみているのだろうかとスタンレーは思った。こんな綺麗なものを眺めているから、ポーラはいつまで経っても少女のような華やかさを失わないのだろうか。

スタンレーが、色とりどりの花にそんな思いをはせていると、ポーラが振り返った。

「これよ。この木なの…まだ小さいけれど……綺麗でしょう？」

そこにあったのは、本当に小さな木。『木』という言葉からどこかスタンレーが考えていたような、それなりの大きさを持ったものではなく、小さくて、幹も細くて、たよりない印象の木だった。だが、その木が白い花を咲かせている。それは、庭園にある他の大輪の花よりは地味な印象だ。花弁はそれほど大きくはないし、遠くから見れば、全体が白っぽく見えるぐらいでしかない。

だがそれが、不思議に印象的に、スタンレーの瞳に映った。どうしてだか、目を離せなかった。

「貴方、どうしたの？」

そんなスタンレーを見て、ポーラが驚いたような声を上げる。

それも道理だろう。スタンレーの両の瞳からは、涙が流れていた。

記憶の奥底に封じられている、大切な存在を求めて、涙が流れていた。忘れられることを望みながら、忘れられることを悲しんでいた、真実の息子を想って、彼は泣いていた。

だが、彼の記憶は封じられているがゆえに、自分がなぜ泣いているのか分からない。だからこそ。どうして自分が泣いているのかも分からない自分が哀れで、彼の涙は止まらなかった。

スタンレーは、彼のひとり息子が寂しがり屋なことを、知っていた。しかし、それに気づけないほどに不器用な息子を、スタンレーは心の奥底から愛していた。だから、泣けない彼の代わりに、涙はとめどなく流れるのだった。

11．なくした記憶（後書き）

さて、これで1章の完結となります。2章は、アルベルトゥスと旅立ってしまったルドヴィクスのお話になります。

ちなみに、章題の『忘却の森の章』ですが、ここにある「忘却」は、村人から忘れ去られたオリーブの木、自らの過去を忘却していたルドヴィクス、そして記憶を失ってしまうスタンレーとポーラの夫婦にかけられていました。

1．歌声

森の中に、澄んだ歌声が響く。伸びやかな高音が、空気を振動させながら、高らかに歌い上げられていた。

その美しい歌声に惹かれるようにして、歩を進めていく少年の姿がある。歳は１７歳ほどだろうか。１０代後半と思われる少年は、あまりに印象的な見た目をしていた。まず、この国では珍しい、艶のある黒髪の持ち主である。髪は短かったが、後ろ髪の一部を鎖骨まで伸ばしている。肌は白く、琥珀色の瞳は、光の加減で金色にも見える。そして、その色彩が印象的なだけでなく、少年は顔立ちそのものが非常に整っていた。

細身ではあるが、女性的なわけではない少年に対して、花に例えるのは間違っているだろうか。しかし、そのあでやかさは、薔薇やクレマチスのような大輪の花のようだった。

人目を惹き付けて離さないような、そんな美貌を少年は有していた。その印象的な色彩に目を囚われたが最後、その美しさに目をそらせないような美貌。それに、敏感な人間ならば、人外の気配すら感じるかもしれない。

そして、それは正しかった。少年は、人ではない。少年自身ですら長らく忘れていたが、彼は人ならざる存在だったのだ。

己が何ものだったのか、彼は未だに思いだせない。ただ、ルイス・カルヴァートという、人間としての名前ではなく、ルドヴィクスというのが本来の名前だと思い出すことができただけだ。

ルドヴィクスは、その美貌へ寄せられる感嘆の視線も畏怖の視線

もない森の中を、ただ歌声の元を目指して歩んでゆく。

歌声の主は、神秘的なほどに美しい響きを、あたりに響き渡らせている。その美しいメロディに乗せられる言葉は、悲しい歌詞だ。遠い故国を思う歌。

その歌詞に出てくる「男」が、どのような理由で、故郷を離れなくてはならなかったのかは、詳らかにはされていない。だが、遠い地にあって、2度と戻れぬ故郷の情景を思い綴っているもの悲しい歌だ。

清らかな水をたたえた澄んだ泉。水辺に咲く水仙の花に、野兎が駆ける森。雨上がりに虹がかかる山の向こうに、冬になると雪に覆われる、清らかな地。

二度と帰れないという歌詞は、作者不詳で、様々な解釈がなされている。

曰く、ヤルヴィ王国で人質として生涯を終えた、古の王子の心境を綴った歌だ。曰く、故国を冤罪で追放された、貴族の青年が作者である。曰く、新大陸を目指した航海士が、船の座礁によって故国に帰ることが出来なくなったことから作られた歌である。

だが、どのような解釈をしようとも、そこに綿々と綴られているのは、帰りたい場所に帰ることのできない悲しみだった。

それが、ルドヴィクスの胸を揺さぶっていた。

ルドヴィクスが、「家」を捨てたのは、1ヶ月ほど前だ。距離的には、それほど離れているわけではない。だが、もう2度と帰れない。もう、ルドヴィクスを待っている人がいないからだ。かつて愛

していた人たちは、大切な人は、皆ルドヴィクスのことを忘れているのだ。

それは、ルドヴィクス自身が望んだことだ。従者に命じて、彼らの記憶を消してもらった。

それが必要だと思ったから、大切な「両親」を、異形であった自分自身の事情に巻き込まないために、ルドヴィクスはそれを望んだ。

だが。ルドヴィクスの中に息づく記憶が、今もこんなにもルドヴィクスを苦しめる。

己が人でないことを思い出したから。だから、彼らとは一緒にいられないと思った。だが、人として生きていた時間、育ててくれた父と母を愛して慕っていた気持ちは、ルドヴィクスの中に未だ息づいていた。

人ではない身に宿るのは、人が愛としか言えない感情だ。

帰りたい場所がある。それなのに、2度と帰れない。

その気持ちが、少女の歌声に同調していく。

気がつくと、ルドヴィクスの琥珀色の瞳からは涙が流れていた。

歩いてゆくと、その歌声の主の姿が、木陰の中に見えてきた。少し癖の強そうな長い茶色の髪が、木漏れ日をはじいて、一部金色めいて見えた。少女は、長い髪を後ろで少し集めて、水色のリボンで結んでいた。

朽ちて倒れた老木に、服が汚れることも気にせずに腰掛けている少女の傍には、黒い子犬がいる。子犬は、嬉しくてたまらないとばかりに、尻尾を振っていた。

それは、とても美しい情景だった。

木漏れ日が光の筋を描く森の中、伸びやかに歌う茶髪の少女と、それを聞いているかのような黒い子犬。

だが、心地いい歌声と、その空間を乱したのは、ルドヴィクスが歩んでいくときの、木の葉を踏みしめる音だった。それに、その歌姫ははじかれたように振り返る。

「…誰！？」

だが、振り向いたことであらわとなった少女の容姿に、ルドヴィクスもまた驚いていた。

振り向いた少女の瞳は、血で染めたように、赤かった。

2．閉塞と開放

「ルドヴィクス様。お目覚めの時間です。今日の紅茶は、ウィンセレット社の、プリンセス・クリステルをご用意いたしました」

「ん……」

カーテンがひかれて、眩しい朝日が直接顔に当たる感覚に、ルドヴィクスは顔をしかめた。

すると、黒い子犬がベッドの上に上がると、甘えるようにルドヴィクスの頬を舐めた。それに、ルドヴィクスの口元がゆるむ。

「……レオ…」

愛犬の名前を呼ぶと、その頭をなでる。

そして、薄く瞳を開くと、真っ先に目に飛び込んでくるのは、黒い犬だった。そして、ベッドの脇にあるカートの上には、ティーセット。それを押しているのは、長い銀色の髪の男、アルベルトゥスだ。見た目は２０代半ばほどに見え、腰に届きそうなほどに長い髪を、顔のサイドでゆるく結び、前に流している。癖のない美しい髪は、それだけで十分に引き立っていた。

体格は身長が平均より高めで、その顔立ちは驚くほどに整っているが、硬質な印象が強い。純銀のようだと、ルドヴィクスは思う。この上なく美しいが、触ると硬くて冷たい銀の彫像。アルベルトゥスの美貌には、そうした硬質な印象が強い。その髪が、混じりけのない美しい銀色であることも、その印象を促進するのだろう。

ルドヴィクスが身を起こすと、アルベルトゥスが、ソーサーに乗ったカップを渡してくる。

「…ありがとう」

ルドヴィクスは、自然にそう言うと、紅茶をこくりと嚥下した。

美しい水色をした紅茶は、口に含むと、極上の香りが口内に広がる。紅茶の香りに添えられた、ベルガモットのさわやかな香り。コクのある味を楽しんでから、ゆっくりとそれを飲み込む。

そして、いつも思うのだ。アルベルトゥスの入れる紅茶は、今まで飲んだどの紅茶よりもおいしいと。

味わって紅茶を飲んだ後、ルドヴィクスは、アルベルトゥスにカップとソーサーを返す。

「今日も……おいしかった」

そう感想を言うのは、ルドヴィクスの習慣だ。

ルドヴィクスは……否。ルイス・カルヴァートという少年は、父母に、感謝を忘れないようにと育てられてきた。日ごろから、褒めるべきところや認めるべきところで言葉を惜しまないのが、仕えられる者の義務だと、教え込まれてきた。

だが、自然に身についたそれも、どうしてだかアルベルトゥス相手だと、ルドヴィクスはやりにくくてしょうがない。

素直に、認めたくないのだ。

未だかつての記憶を完全に思い出していないルドヴィクスには、アルベルトゥスがなぜ自分に忠義を誓っていてくれているのかも分からないままだ。だが、アルベルトゥスが丁寧にルドヴィクスに仕えてくれているのも事実なのだ。

中途半端に記憶を取り戻し、どうすればいいのか分からなかったルドヴィクスの代わりに、この屋敷を用意したのはアルベルトゥスである。そして、ルドヴィクスの身の回りの世話を完璧にこなしている。

アルベルトゥスの入れる紅茶は絶品だし、彼は料理ですら得意なのだ。

正直なところ、ルドヴィクスは、彼と生活を始めてから、料理をこなすアルベルトゥスの姿に度肝を抜かれた。しかも、下手をすれば、カルヴァート家のコックの作るものよりもおいしいのである。

魔族のくせに、人間離れした美貌の持ち主の癖に、手ずから野菜や肉を切ったり、フライパンや深鍋を使って料理をしたりしている姿は、正直なところシュールに過ぎる。

この屋敷には何人か使用人もいるのだが、ルドヴィクスの口に入るものの調理や、身の回りの世話はほとんどアルベルトゥスひとりでやっている。『下級な使い魔や人間ごときに御身に触らせるわけにはまいりません』というのがアルベルトゥスの言い分だ。

別にそこまでしなくてもいいとも言うのだが、彼なりのこだわりがあるようだったから、ルドヴィクスは好きにやらせている。だが。

「……着替えは手伝わなくていいと言ったはずだ」

ルドヴィクスは、呆れたようにそう言う。

アルベルトゥスのそれは、まるでほんの幼い子供にするように、甲斐甲斐しすぎる。あるいは、王侯貴族にでもするがごとく。

一部の上級ブルジョワや、貴族などは自分の身の回りのことをすべて使用人にさせ、湯浴みですらひとりではしない人間も珍しくは無いと聞いてはいたが、ルドヴィクスとしては、自分がそのように扱われても戸惑うだけだった。

カルヴァート家では自分でできる最低限のことはさせられていたし、それが当然として育ってきたのだ。料理や洗濯などはさすがにできないが、紅茶を入れたり、最低限の身の回りのことは自分でするのが、「ルイス・カルヴァート」の常識だった。

過保護すぎるアルベルトゥスの手を振り切り、ルドヴィクスはさっさとひとりで身支度を整える。

朝食の席には、焼きたてのクロワッサンと、スクランブルエッグにベーコン。マッシュルームのソテー、焼きトマト、ブラックプディング、ポタージュスープ。そしてデザートとして、ミルフィーユと、先ほどとは違う種類の紅茶がそろっていた。

いつもながらの、完璧な取り揃えである。

テーブルの下に置かれた皿には、ルドヴィクスの皿に載せられたものと同じミルフィーユが置かれている、上機嫌の証のように、尻尾を振りながらそれを食するのは、先ほどの黒犬である。菓子類を好むのを見て、最初は愕然としたのも記憶に新しい。

でも、何だかんだで環境には順応するもので、今ではケーキやクッキーなどに目がない犬の姿を見ても、ルドヴィクスは驚かなくなっていた。それどころか、大喜びで好物の菓子に飛びつく姿に、微笑ましさすら感じる。

そして、いつもの光景になる朝食の席で、ルドヴィクスは少しだけ前の時間に思いをはせた。

『ここは…』

『ルドヴィクス様のお部屋です』

アルベルトゥスの言葉に、ルドヴィクスは辺りを見回す。ベッドは天蓋付きベッドというもので、カーテンがかかっていた。

絨毯は足の長いもので、ふわふわとした感触が、靴底から感じられた。置かれている家具は、オーク材のもので、全て綺麗に磨きこまれたものだった。

壁は、白い大理石であり、凹凸が彫られている上に、金を基調とした色彩で彩色されている。

窓にかかっているカーテンは、淡いグリーンで、室内を明るくする役割を果たしている。

ルイス・カルヴァートがかつて持っていた部屋も、それなりに広

く豪華なものだったが、この部屋に比べると、所詮は地方ブルジョワの屋敷といったランクのものにすぎなかったのがよく分かった。

広すぎる部屋は、どこか落ち着かない。

『お気に沿わなければ改装いたしますが？』

『――！　いや、この部屋でかまわない…！』

不必要なまでにわがままを言うのも、この豪奢な部屋に気後れしているというのを素直に言うのも嫌でルドヴィクスはそう言った。

どうしてだか、アルベルトゥスの前では弱みを見せたくなかった。

『ルドヴィクス様、それからもうひとつ。お会いしてほしい者がおります』

『え……？』

『御前にお呼びする許可をいただけますか？』

『それはかまわないが……。誰なんだ？』

『それは、直接お会いしたほうが早いかと。――レオナルドゥス！』

アルベルトゥスがそう声を張り上げると、突然、黒い子犬が現れた。

子犬は、ルドヴィクスを見ると、嬉しそうにほえる。

『レオナルドゥス……。いや、レオ？』

その言葉が自然と、ルドヴィクスの口から出てきた。

胸からこみ上げてくるのは、懐かしさと愛情。

不完全な記憶では、名前しか思い出せないが、本能がこの子犬を慕わしいものとして覚えていた。

『おいで。レオ……』

優しくそう言うと、レオナルドゥスは尻尾を激しく振りながら、ルドヴィクスにとびつく。それを抱き上げて、そのぬくもりに、ルドヴィクスは安心感を覚えていた。

朝食を食べ終わり、ルドヴィクスは、読書に没頭する。

アルベルトゥスは、こちらが呆れるほどに様々な娯楽を用意していた。だが、ルドヴィクスがことさら好んだのは、読書だ。

しかし、さすがに何十日も閉じこもってばかりいてはいい加減飽きるというもの。

だが、ルドヴィクスにはこれ以外にやることがないのだ。アルベルトゥスは、ルドヴィクスが外出することに難色を示した。

アルベルトゥスの言い分としては、外を出るには、ルドヴィクス

の力は不安定にすぎるというものだった。

力を取り戻したばかりで、未だにそれのコントロールがうまくできないルドヴィクスは、感情の高まりと共に力を暴走させてしまうことがある。悪夢を見て飛び起きたら、部屋の中のものを、気づかぬうちにずたずたにしていたこともある。

起きている時は比較的コントロールできるのだが、苛烈な怒りに囚われた時、自らの力を抑えるのが一苦労であるのは事実だった。

『今のルドヴィクス様は強大な力を持った赤子も同然です。御自身の御力ですらコントロールできない。……ルドヴィクス様の御力は、魔族にとっては垂涎のもの。不安定な貴方は、格好の餌食なのですよ。それを、ゆめゆめお忘れなく……』

アルベルトゥスの言葉を思い出して、ルドヴィクスは唇をかみ締める。

赤子扱いされるのが、屈辱でなくて何なのだ。

アルベルトゥスの献身は認める。だが、その言葉の端々に侮辱する響きがあるような気がして、ルドヴィクスは腹立たしく感じる。しかも、正論だから反論も出来ないのだ。

正論で言い含めるのなら言い含めるでも、もう少し言い方というものがあるのではないかとルドヴィクスは思う。

しかし、アルベルトゥスがやわらかく言ってくれたら気持ちがいいのかと考えると、そうでないのかもしれなかった。ルドヴィクスにとって、アルベルトゥスのやることは、全て気に食わないのだ。

ルドヴィクスは、窓から見える森を見つめる。この森は、かつてルイス・カルヴァートという少年が住んでいた村の近くにあった、リファーズの森とは別の森だ。とはいえ、森を見慣れた身からすれば、その光景は郷愁を誘うものだった。

その森の中の木から、木の葉が一枚落ちる。ルドヴィクスは、それに力を放った。その一枚の葉が、無数に切り裂かれる。

「…もう。これぐらいのコントロールなら出来るんだ……」

そして、そう呟いた。

ルドヴィクスは、自らの時間を、レオナルドゥスと過ごしたり、読書をしたりするだけでなく、自らの力をコントロールできるようにする鍛錬の時間にもあてた。

その結果が、この力のコントロールである。

自分は、けして無力なわけではないとルドヴィクスは思う。

今のルドヴィクスは、もともとの力の6分の1しか持ち合わせていないのだが、それでも十分なほど、ルドヴィクスのかつて持っていた力は強大であった。少なくとも、今の力でも、並の相手に負けるとは思えない。それが、ルドヴィクスの実感であった。

ましてや、このまま、無力を理由に閉じこもっていて何になるというのか。

アルベルトゥスは、かつてルドヴィクスが手放した力がどこにあ

るのかを探していると言っていた。しかし、いつまで待てばいいのだ。何もできない、死んだような生活を、いつまで続ければいいのだ。

焦りは、ルドヴィクスに苛立ちを生む。

「……仕方がないな。アルベルトゥスが外に出てはいけないと……」

横にいたレオナルドゥスにそう声をかけながら、ルドヴィクスははたと気づいた。

「外に出てはないけない……？」

それは、アルベルトゥスが言った言葉とは微妙に違ったが、ルドヴィクスはその言葉をそう認識していた。正確には、『貴方はまだ、外出されるべきではありません』であったが、今のルドヴィクスにとって、その違いは些細なものだ。

「――誰が、主なんだ……？」

従者であるアルベルトゥスに、意見は求める。だが、最終的に決めるのは、主である自分であるべきではないだろうか。

それなのに、なぜ。アルベルトゥスの意向に、こちらが従わなければならないのだ。

それは、苛烈な反感だった。

素直に育ってきた、ルイス・カルヴァートという少年にはなかったもの。ルドヴィクスは、勝気に口の端を吊り上げる。それに、普段は力を抑えて琥珀色に留めている瞳に、わずかに金色の光がよぎ

る。
それを、レオナルドゥスは、魅了されたようにじっと見つめいていた。
「……レオ！　たまには散歩に出るぞ！」
わん！　とそれに元気よく返事をしたレオナルドゥスを抱き上げると、ルドヴィクスは窓から身を投げた。
この部屋は2階に位置しているが、ルドヴィクスの力を使えば、着地の衝撃を和らげるなど造作もない。そして、ルドヴィクスは、森の中に姿を消したのだった。

１０分後。アルベルトゥスは買ってきたばかりの新鮮な野菜をテーブルに置きながら、頭を抱えていた。
「いつまでもあの御方がおとなしくしていてくださるとは思っていませんでしたが……」
そうだ。いつだって、ルドヴィクスは、自分の思い通りになったことなどなかった。そう思うと、苦いような笑みが口元に浮かぶ。
巨大な獣の背に乗って逃亡していく姿を、幾度見ただろう。
『義務は果たしておろう！　些細な息抜きじゃ、大目に見よ！』
強気に笑いながらの言葉に。憤慨しながらも、結局最後に折れる

のは自分の方だった。

在りし日の思い出は、鮮やかにアルベルトゥスの胸の中に蘇る。

しかし、あの時とは事情が違うのだ。

ルドヴィクスは、己がどれほど不安定な存在であるのかを自覚していない。

能力のこともあるが、それ以上に、その心だ。人として在った日々が、ルドヴィクスに人としての自己認識を植えつけている。しかし、中途半端に取り戻した記憶から、自らが人外であることは理解している。

だが、危ういのだ。自らが、人かそうでないのか。その境界が、とても危うい。

自己をしっかりと持っていない存在は、非常に脆い。

アルベルトゥスは、買ってきた食糧を使用人に片付けさせる指示をしてから、ルドヴィクスの気配を探った。

2．閉塞と開放（後書き）

思えば、料理から何からできるアルベルトゥスはわりと万能キャラですね（笑）。材料にこだわるので、買出しから手ずから行っているようです（ルドヴィクスの食事限定）。おそらく、じゃがいもとかトマトとか一生懸命選んでらっしゃいます（笑）。はい、1章から見ればかなーりギャップがあるのではないかと（笑）。

レオナルドゥス、愛称レオ君は名付け親のセンスのせいで、中々にいかつい名前ですが、癒し系として持ってきました。アルベルトゥスとルドヴィクスは、主従関係ながら、冷戦状態（主にルドヴィクスからの反感）なので、レオがいるだけで空気が緩和されること請け合いです。

3．異相の少女

ルドヴィクスは、森の中を気ままに散策していた。長い間、幽閉されたような生活をしていた身には、ただの散歩がとても楽しい。

木々が発する心地いい空気を浴びながら、レオナルドゥスと一緒に、ゆっくりと歩く。

そして、ルドヴィクスは、ここはどこだろうとぼんやりと考えた。

アルベルトゥスに訪ねると、ルスカ王国の東南部の地名を教えられたが、大まかな位置は把握できても、例えばこの森の名称などまで分かるわけではなかった。時間はあったのだから、せめて地図で確認しておくべきだったかと、ルドヴィクスは若干の反省をする。

とはいえ、ただ散歩をするだけで、位置の把握の必要もそうないであろうと楽観的に考える。別に、家出をしようというわけではないのだ。退屈だから、少し遊びに出ているだけ。それだけである。

その時、腕の中に抱いていたレオナルドゥスが、突然体をぴくりと動かした。

「レオ？　どうした……うわっ！」

突然、腕の中から抜け出て、走っていくレオナルドゥスに、ルドヴィクスは驚いた。

「どうしたんだ、レオ！！」

そう言って、ルドヴィクスはレオナルドゥスを追う。しかし、さすが犬だけあって、レオナルドゥスの足は非常に速く、ルドヴィクスはすぐに振り切られてしまった。

「……どこ、いったんだ……」

困惑してそう呟いたルドヴィクスの耳に、かすかに澄んだ歌声が聞こえた。

耳を澄ますと、それは女性の歌声だった。ほとんど聞こえるか聞こえないかぐらいの音だが、非常に美しい声だというのは、すぐに分かった。

その歌声に惹かれるように、ルドヴィクスは歩を進めた。

「スマイサーさんのお店で、チーズを買ってくればいいのね？」

「ああ。ジャスティーナ。悪いけど頼んだよ」

「じゃあ、行ってくるね。お母さん」

ジャスティーナ・ハースは、帽子をかぶりながら、母であるマーシャにそう言った。

マーシャは、少しふくよかだが、優しげな顔立ちをした女性だ。ジャスティーナと同じ色彩の茶色の髪だが、癖だらけのジャスティーナのそれとは違い、マーシャの髪はほとんど癖のないストレート

だ。それが、ジャスティーナにとっては不満であった。朝起きたとき、必死に梳かしてもあっちこっちに跳ねてしまう髪は、１５歳のジャスティーナにとっては、重大な問題であった。なぜ、髪の色だけでなく、髪質も一緒に受け継げなかったのだと、つくづく思ってしまうのだ。

そうでなくても、重大な欠点があるのに。元気に微笑む裏で、そう思うと少しだけ悲しかった。

ジャスティーナは年頃の女の子らしく、その癖毛を気にはしているが、そんなもの、この忌まわしい瞳に比べれば、何ということもなかった。

ジャスティーナが生まれながら有している瞳の色は、鮮血のような赤だった。

母であるマーシャの瞳の色は、青く、父であるスコットの瞳の色は灰色だった。それなのに、ジャスティーナの瞳の色だけが、このような異様な色なのだ。

ジャスティーナは、自分のような色の瞳を持った人間を他に見たことがなかった。その色は、他の人間にも異様に移るらしく、初めて会った人間は、大抵ジャスティーナの瞳をまじまじと見る。その視線が嫌だった。

子供の頃は、近所の子供に、「魔女」と言われて苛められた。だから、ジャスティーナは、同じ年頃の友達がいなかった。

でも、些細なことは気にしないと、ジャスティーナは気を取りなおして買い物に行く。

村で唯一のお店である、崩れそうなほどに古い店の扉をあける。聞くところによると、ジャスティーナの曾おばあさんの代からずっと続いているというお店は、とても古かったが、内部は綺麗に掃除が行き届いていた。

壁にしつらえられた棚には、様々な商品が並んでいて、ジャスティーナにとっては見ているだけでも楽しい。ジャスティーナは、壁に並んでいる綺麗な色のリボンに気を取られる自分を律しなければならなかった。

「こんにちは。スマイサーさん」

「おお、よく着たね。ジャスティーナちゃん」

ジャスティーナが挨拶をすると、老女がその顔をしわくちゃにして微笑んだ。スージー・スマイサー。この店の主である。

ジャスティーナはこの老女が好きであった。小さい頃から可愛がってくれた、数少ない大人だったからだ。

「今日は、チーズを買いに来たんです。新鮮なの、入っていますか」

「ああ、あるよ。運がいいね。丁度、ペラムのところから、新鮮なのを仕入れたところさ」

そう言いながら、スージーは、棚からチーズを取り出して、ジャスティーナが望む量に分けた。

その間、どうしてもジャスティーナは、棚にあるリボンを見てし

まう。特に気になったのは、水色のリボンだ。おそらく絹であろうリボンは、つやつやと輝いていていた。藍色の刺繍糸で、クロス模様がついていて、ふちを白いレースが彩っているリボンは、どきどきするほど可愛らしく思えた。

村の女の子たちが、ちょっとしたお洒落を楽しむときは、こんなリボンを親にねだって買ってもらうのだ。貴族のお姫様が着るようなドレスは、貧乏な村人にはとても手が出ない。だけど、少しお洒落なリボンぐらいなら、少し頑張れば手が届く。

ボーイフレンドのひとりもいない身とはいえ、ジャスティーナにもちょっとしたお洒落には興味がある。

だが、思いなおして、ジャスティーナは、自分の格好を改めて見た。実用的な、茶色の服。マーシャが作ってくれたものだから、もちろん大切なものだ。

だが、ハース家は、お世辞にも裕福な家庭とは言いがたかった。主な理由は分かっている。自分の、せいだった。

ハース家は、まじない師の一族だった。まじない師といっても、妙な呪術などを使うものではなく、主に薬草を煎じて、風邪や腹痛にきく薬を作っていたのだ。

だが、最近出てきた医者という職種の人間に、村々のまじない師はその立場を危うくさせられていた。でも本来ならば、いわゆる新参者である医者よりも、伝統あるまじない師を支持する村人の方が多かったはずなのだ。

しかし、それが変わったのは、ジャスティーナのせいだった。村

人は、ジャスティーナの瞳を気味悪がった。そして、そのような娘を持つハース家との交流を嫌がるようになったのだ。悪魔と契約を交わした魔女の印であると、本気で思っている人間も少なくない。

そんなことから、ハース家は没落し、今では生活も大変なほどだ。

全部、自分のせいなのだ。ジャスティーナはそう思っていた。だから、罪の無い村の娘がねだるような可愛らしいリボンを、自分がねだるわけにはいかないと、ジャスティーナは自分に言い聞かせていた。

「と。これで、全部だね。お代は、４マードだよ」

ジャスティーナは、５マード硬貨を差し出して、１マードのおつりをもらった。

「…リボンが気になるかい？」

しかし、続けられた言葉に、ジャスティーナは、飛び上がるように驚く。

「そっ！　そんなっ！　別に、私なんて…。こんなごわごわな髪にリボンなんて付けても似合わないですよ！」

慌ててそう言い訳をするが、言い訳のつもりが、事実に即しすぎて落ち込んでしまう。経済力云々の前に、このどうしようもない髪があったのだと思うと、地にめり込みそうだった。

「…そんなこと、あるもんかね。ちょっとお待ち」

スージーはそう言うと、棚からリボンを取り出して、ジャスティーナの髪に触れた。

「…え？　あの……？」

困惑するジャスティーナに構わず、スージーは、ジャスティーナの髪をまとめる。

「よいしょっと、これでいい。ほら見てごらん。可愛いだろう。…お前さんは、マーシャの若い頃に似て美人だよ」

スージーはそう言いながら、ジャスティーナに鏡を見せた。ジャスティーナは、合わせ鏡の要領で、自分の頭を映す。そうすると、あの可愛いリボンが、自分の髪に結われているのが見えた。

似合うかどうかはともかく、あの可愛いものを身に付けられているということに、ジャスティーナの胸の中には、少女らしい喜びが満ちてゆく。

だが、すぐに現実に立ち戻った。

「…でも、こんなの、分不相応だから……」

そう言って、リボンを取り外そうとするジャスティーナの手を、スージーは留める。

「……もっておゆき。お前さんの一家には、薬を卸してもらって、随分と世話になっているからね。たまには、お返しもせにゃ」

スージーはそう言うが、それは誤っていた。

ジャスティーナのことが気味が悪いと、ハース家を避けている村人も、ハース家からこの店のワンクッションを置けば、手に取ることも多い。その前提の取引で、スージーは、ハース家の窮地を知っているからこそ、ほとんど利潤を得てなかった。

だが、スージーはそんなことは分かった上で、申し出てくれたのだろう。スージーのしわくちゃな顔の中にある、緑色の瞳がとても優しかった。

「あ、ありがとう……。スージーさん……！」

ジャスティーナは、泣きたいほどに、嬉しかった。

リボンが手に入ったことそのものではなく、スージーの厚意が、とても嬉しかった。

散々お礼を言って、意気揚々とジャスティーナは店を飛び出した。ジャスティーナは、浮かれていたのだろう。だから、店を出るところで、他の客とぶつかりそうになった。

「ごめんなさ…！」

謝罪しようと、顔を上げたジャスティーナを見下ろすのは、厳格そうに眉根の間にくっきりとしわの刻まれた女性の顔だった。

彼女は、無言で不快そうにジャスティーナを見ていた。

「うわ、魔女だ……っ！」

そう言ったのは、女性のつれである13歳の男の子だった。2人が村の人間であり、親子であることを、ジャスティーナは知っている。

ジャスティーナは、その視線に、浮かれた気分が一瞬で吹っ飛ぶ。自らの容姿を思い出して、後ずさると、恐怖に駆られたように走り出した。

「全く。いつ見ても気味が悪いわね…。あの取替えっ子…」

こんな時ほど、ジャスティーナは普通以上の聴力に恵まれたことを恨むことはない。小さな声で呟かれたはずなのに、ジャスティーナの耳にそれは届いてしまうのだから。

村人は、ジャスティーナのことを魔女と呼ぶことがある。

それとは別に、「取替えっ子」と呼ぶことも多くあった。この地方には伝説がある。この地には妖精がいて、時折、人間と妖精の子供を取り替えてしまうのだ。それを、「取替えっ子」と呼ぶ。

取替えっ子は妖精の子供であり、人間ではないから、人間とは違う特色があるという。だからこそ村人は、ジャスティーナの、異様な赤い瞳は取替えっ子の証だというのだ。

ジャスティーナは、魔女であると言われることにも傷つく。だが、「取替えっ子」と言われるのが、一番辛くて悲しかった。大好きな両親の実の娘ではないと、人が言うのだ。悲しくないわけがあるだろうか。

おまけに、最近ではさらに変な噂を流されていることをジャステ

ィーナは知っていた。ただ、瞳の色が普通じゃないというだけで、人々は奇異の目でジャスティーナを見る。

だから、ジャスティーナは、人の視線が、怖かった。

4．森のコンサート

ジャスティーナは、買ったものをマーシャに届けると、店を出る時の悲しい出来事はおくびにも出さず、浮かれたようにリボンのことを報告した。それを聞く、マーシャの瞳は、スージーと同じような光がともっていた。

森を歩きながら、ジャスティーナはそんなことをつれづれと考える。

村人のほとんどは、自分に対して冷淡であったが、両親には愛されているし、スージーのような親切な人もいる。それだけで、十分に幸福ではないかと、先ほどの言葉の刃で傷つけられた心を癒すのだった。

自分は別に、万民から愛されたい八方美人ではないと、ジャスティーナは思う。愛されていたい人には愛されている。

子供の頃、あまりに「取替えっ子」と人から言われ続けるので、本当に両親の子ではないのかと、両親に尋ねたことがある。それに、マーシャとスコットは、間違いなく自分たちの子供だと保障してくれたのだ。それを疑われるのは、それだけで悲しいと。

だから、他の誰が馬鹿なことを言っても、ジャスティーナは毅然として無視をしてもいい。そう思う。

それなのに、傷つきやすい少女の心が、人の言の葉で傷ついてしまうのは抑えられなかった。

眉根をひそめて、「取替えっ子」と言う大人の悪意。「魔女」とはやし立てる子供の悪意。

本当に心を傷つけるのは、言葉そのものではなく、そこに含まれた人の悪意ゆえだということに、ジャスティーナは気づかない。人が平然と人を傷つけるという事実。それが、ジャスティーナを何よりも傷つけていた。

ジャスティーナは首を振ると、大好きな歌を歌うことにする。

ジャスティーナは昔から歌が好きだった。あまりに歌ってばかりなので、両親はジャスティーナのことを『私たちのカナリアちゃん』と呼ぶ。

歌を歌っている時が、ジャスティーナにとって何よりも幸せな時間だった。

ジャスティーナがその時に選んだ歌は、昔村に来た旅芸人のひとりが教えてくれた歌だ。遠く離れた故郷を思う歌。

少し物悲しいメロディのその曲を選んだのは、やはりジャスティーナの気分が落ち込んでいたからかもしれなかった。

歌い始めると、突然がさがさと音がして、黒い子犬が飛び出してきた。それに、ジャスティーナは驚いて歌を止める。それに、その犬は悲しそうにクーン、と鳴いた。黒い毛並みがつやつやと綺麗なことから、どこかの飼い犬だろうかとジャスティーナは思った。

「おいで、ワンちゃん。…私の歌を聴いてくれにきたの？」

ジャスティーナがそう言うと、その言葉が分かるかのように、犬は元気よくほえる。

それに、ジャスティーナは微笑んだ。

歌を歌っていると、こういうことはよくあったからだ。小鳥が周りに集まってきたり、野兎が周りを跳ね回ったり。

森の中は、ジャスティーナの素敵なコンサート会場だった。

ジャスティーナはその異相から、人間の友達はいなかったけれど、その代わり、森の中で見つける友達に心を慰められてきた。そんな様子が変わっていると、また村人に奇異の目で見られる原因でもあったのだが。

尻尾を振る黒犬は、歌を催促してくれているかのようで、ジャスティーナは微笑む。

「じゃあ…最初から」

そして、ジャスティーナは、この可愛いお客に聞かせるために、また歌声を響かせる。

澄んだ高音が、あたりに響き渡る。

ジャスティーナの歌には、不思議な魅力があった。技術的には、未熟な部分もあるだろう。だが、音域が幅広く、そして何よりも人の心を魅了する天性のものがあった。

それに、黒犬はうっとりしているかのように、ジャスティーナに

は見えた。

心地いい時間。しかし、それを無粋にも破ったのは、闖入者の足音。それが動物ではなく人間のものだと直感的に察したジャスティーナは、誰何の声を上げた。

「…誰！？」

そう声を張り上げて、振り向いた。

そして、そこにあった少年の姿に、ジャスティーナはしばし驚愕の表情を浮べた。

漆黒の髪に、琥珀のような色の瞳。女性よりも更に白い肌。それは、極上の美貌を持った少年だった。おそらく自分よりも少し年上なのではないかと思える細いシルエットの少年は、初めて見る人間だった。着ているものも、村人とはまるで違う極上の仕立てのもので、一目で彼が上流階級の人間なのだということが分かった。そして、ルスカ王国ではあまり見られない黒髪から、彼は外国人かもしれないとジャスティーナはそう思う。

ジャスティーナの考えとは別に、彼は驚いたように、その美しい瞳を見開いていた。

その少年の美貌に見とれていたジャスティーナは、すぐにはっとなる。

この美しい少年の瞳に映るのが、異様な瞳を持った自分の姿だということに気づいたからである。みっともない癖毛に、忌まわしい血の色の瞳。そして、１５にもなるのに、全く女性らしいふくらみ

もない幼い肢体。

その少年が、その秀麗な顔を嫌悪にゆがめるのが想像できる気がした。ジャスティーナには、こんなにも美しい少年にそんな表情を浮べられるのは耐え難く思えた。

「……いで」

気づくと、口からその言葉が漏れていた。

「……え？」

「……見ないで……っ！！」

ジャスティーナはそう言うと、両手で顔を覆う。

「君、どうかしたのかな？」

そんなジャスティーナの様子に、少年が心配そうな声をあげた。嫌悪のない少年の声に、ジャスティーナは、もしかしたら彼は暗い森の中の一瞬の邂逅に、瞳の色にまで気づいていなかったのではないかと思えてきた。

そう思うと、ジャスティーナは少し安心をした。

「ごめんなさい……ちょっと……」

うまい言い訳が見つからなくて、ジャスティーナは少年に背を向ける。

そのまま、2人の間に沈黙が落ちる。その静寂に耐えかねたように、少年が口を開いた。

「……こいつ、君のことが気に入ったみたいだね。……昔から、歌が好きだったから」

「いえ……そんなことは。貴方の犬だったんですね」

背を向けたまま、ジャスティーナはそう言う。

「レオナルドゥスっていうんだ」

「え……それが、犬の名前……ですか？」

「うん。愛称はレオ」

その言葉に、ジャスティーナは思わず笑ってしまう。

「格好いい名前ですね」

妙に古代じみた、いかつい名前をもつ犬に、そう言う。しかし、それは嘲笑ではなく、なんだか妙に微笑ましかったのだ。

「……ああ。そう……。たしか……『強い獅子』の意味を持つ名前……。勇ましくて、こいつに似合うと思ったんだ……。そうだ。たしか、俺はそう思ってこの名前をつけたんだった……」

ジャスティーナは、その少年の名前に、首をかしげる。ジャスティーナの目に映った黒い犬は、まだ子犬に見えた。それなのに、随分昔のことを思い出すかのように話す人だと、少し妙に思ったので

ある。

「――獅子ですか。格好いいですね」

しかし、近寄りがたいほどの美貌を持つ少年なのに、案外に無邪気な一面を見せられた気がして、ジャスティーナは微笑む。

「ああ……。ごめんね。俺、怪しい奴じゃないんだけど……。いやまあ、自分で『怪しい奴です』って言う奴もいかないか。でも……ただ、懐かしくて……本当に久しぶりに……人と話したから」

言い訳をするように、少年はそう言った。

どうやら、背を向けっぱなしのジャスティーナの姿勢が誤解を与えたようだった。

「……過保護な奴がいてね。引きこもって暮らしてたんだ。――今まで気づかなかったけど、すごくストレスがたまっていたみたいだ」

「分かります」

思わず、ジャスティーナはそう言っていた。

「――え？」

「えっと、私も……両親が都会に出かけた時とか……あまり話す人がいなくて……」

友人もいない身の上では、両親と少数の親切にしてくれる人が、ジャスティーナにとっての話し相手だった。

ずっとひとりでいると、精神が倦んでくる。

全く違うのに、共通点を見つけた気がして、ジャスティーナは少し微笑む。その時、突風が吹いて、落ち葉が舞い上がった。それが、ジャスティーナに向かって飛んでくる。

「きゃっ！！」

思わず悲鳴を上げて、ジャスティーナは顔をかばった。

「大丈夫……！？」

その様子に、少年が駆け寄ってきた。

「だいじょ……」

ジャスティーナはそう言って、瞳を開けた。その瞳に飛び込んでくるのは、黒髪の少年の美貌。至近距離で見ても、整った顔立ちの少年だった。

琥珀色の瞳が、吸い込まれそうなほどに美しくて。しかし、その瞳に映っている、己の姿にジャスティーナは恐怖する。

「……見ないで！！」

そう言って、ジャスティーナは顔をそらした。

「――さっきも、そう言ってたね。……どうして……？」

少年の言葉に、ジャスティーナは目を見開いた。先ほどはともかく、これほど至近距離で見て、瞳の色に気づかなかったなんてありえないと思ったからだ。

「……だ……って、私の目の色……血みたいなんだもの！　――貴方だって気持ち悪いと思うでしょう！？」

言われてしまう前に、自分で言うほうがまだいいと、ジャスティーナは悲しい自虐の言葉をつむぐ。

「――いや……たしかに珍しい色だと思うけど……綺麗だよ」

「……え？」

少年の言葉の意味が分からずに、ジャスティーナは不思議そうに顔を上げた。

それを、少年は困ったような微笑みを浮べながらも、真っ直ぐに見据えていた。

「ルビーみたいだ。……知ってるかな？　ルビーって、ピジョンブラッドって言われる色が一番価値が高くて美しいと言われてるんだよ。君の瞳を見て、それを思い出した」

『ルビーのような色』。その言葉に、ジャスティーナは、それを言ってくれた唯一の青年を思い出した。淡い茶色のさらさらとした髪の青年は、ジャスティーヌにさえ優しくしてくれた人だった。

だけど、そんな風に言ってくれる人は本当に少なくて。信じられなくて、ジャスティーナは呆然としてしまう。

「もしかして……人に色々言われたのかもしれないけど。人に悪口を言われるからといって、それを自分まで恥じてしまったら、本当に『欠点』にしかならないと、俺は思う。――せっかくそんなに綺麗なのに、俯いてしまうのは持ったいないと俺は思うけど。俺なら俯かない。別に恥ずかしいことをしているわけでもないのに、咎人みたいに俯いて歩くなんて嫌だ。……俺を見て、眉をひそめるのならひそめればいい。俺はそんな雑音、気にはしない」

「――貴方は強いんですね……」

「……ルイス」

「え……？」

「俺の名前。ルイス・カルヴァート。君は？」

「あ……。ジャスティーナ・ハース」

戸惑いながら、ジャスティーナは自己紹介をした。

「今更だけど……。改めて、よろしく」

「はい……。よろしくお願いします」

今更ながらに、そう言って。2人は照れたように笑った。

ルドヴィクスにとってそれは、本当にひさしぶりの人との対話であったし、ジャスティーナにとっては、初めての同年代との忌憚ない会話であった。

自らを人であると信じながらも、人に異端であると言われることによって傷つく者と、自らを人でないと確信しながらも、人でいたかったという痛みを引きずる者。その2人の出会いが、どのような結末を迎えるのか。

――この時はまだ、誰も知らなかった。

ルドヴィクスとジャスティーナは、大した意味もない話に興じていた。深刻なことは何も無い。

ただ、好きな紅茶や食べ物の話や、動物の話。本当に、たわいも無い会話でしかなかった。

しかし、ただそれだけのことが、当人たちにとってどれほどの救いであったのか、本人たち以外には分からなかっただろう。

ジャスティーナにとっては、初めての同年代の「友達」。ルドヴィクスにとっては、己が人でないと自覚してから、初めて人と過ごす穏やかな時間。

しかし、楽しい時間にも終わりが見える。

ルドヴィクスは、左斜め後方を厳しい瞳で睨みつける。

「……ルイス君？　どうしたの？」

「お目付け役の登場みたいだ……。いるんだろう？　アルバート」

ここで、ルドヴィクスが、アルベルトゥスではなく、アルバートというルスカ語の名前で呼んだのには理由がある。ここにいる自分は、ルドヴィクスではなく、ルイスだと知らしめるため。

そして、森の中から、印象的な銀髪の男が出てくる。

「……お探し申し上げました。ルイス様」

彼は、ルドヴィクスの意図を汲んで、そう膝をつく。

「――別に、家出したわけじゃない。放っておいてくれたら勝手に帰ったのに」

つまらない気持ちで、ルドヴィクスはそう言う。

「……そのようなわけには。外には危険がございますゆえ」

アルベルトゥスの言葉に、ルドヴィクスは舌打ちをする。

「勝手にすればいい」

そう言って、ルドヴィクスは立ち上がる。

「帰るの？」

ジャスティーナの言葉に、ルドヴィクスは肩をすくめた。

「鬱陶しいお目付け役がきたからな。――本当、嫌になるぐらい過保護だろう？」

ルドヴィクスが同意を求めるようにジャスティーナにそう言うと、ジャスティーナは困ったように笑っていた。

「……仕方ないから、行くぞ。アルバート、レオナルドゥス！　――じゃあな、ジャスティーナ」

「あ……うん。さようなら……」

ルドヴィクスの言葉に返して微笑むジャスティーナの表情は、どこか寂しげだった。だからこそ、ルドヴィクスは少し微笑む。

「……またな。迷惑じゃなければ、また来る」

ルドヴィクスの言葉に、ジャスティーナの表情が明るくなった。

「うん！！　待ってるね！」

その素直な反応に、ルドヴィクスは優しく目を細めた。

4．森のコンサート（後書き）

ジャスティーナとルドヴィクス。やっぱり女の子が出ると少し雰囲気が華やかになりますね。

5．ぬくもり

「ルドヴィクス様、使用人にいちいち声をおかけになるのはおやめ下さい」

屋敷に戻るなりのアルベルトゥスの言葉に、ルドヴィクスはすっと目を細めた。

「――なぜ」

「使用人に気さくすぎると舐められますゆえ」

「……俺は、カルヴァート家でずっとこうやってきたが？」

「存じております。――富豪商の跡取り、ルイス様ならば、それでもよかったでしょう。あの屋敷は、使用人と雇い主の垣根が薄うございましたから。カルヴァート家ではそちらのほうが都合がよかったかもしれません。ですが……人の世界でも、王侯貴族という立場の人間は、気さくに使用人に相対しないものでしょう。そもそも、彼らは、彼らの職務を果たしているだけ。一々礼など不要です」

「そうか。それで、俺はお前に気に入られるために、『アルベルトゥス様』の『ご命令』を聞かなければならないわけだ」

苛立ちながら皮肉を言うルドヴィクスに、アルベルトゥスは眉根をひそめた。

「ルドヴィクス様！！」

「だって、そうだろう！！　『あれをするな』、『これをするな』……！！　もう……うんざりだ！！　主とは何だ！？　従者の気に入ることに唯々諾々と従う人形か！？　――やめろ……そんな目で俺を見るな……。――お前の視線は……ぞっとする……。一体……お前は何を……誰を見ているんだ……。かつての『ルドヴィクス』か……！？　俺は俺なのに、お前の目は俺を見てない……。ああ……そうだな。お前は、かつての俺に忠誠を誓っているんだからな……。じゃあ、ここにいる……『俺』は偽者なのか……？　俺は……『何』なんだ……！」

アルベルトゥスの視線は、今のルドヴィクスを通り越して、遠い過去を見ている。ルドヴィクスには、そう感じられた。

今のルドヴィクスは、アイデンティティの混乱を内包していた。ルイス・カルヴァートである自分と、ルドヴィクスである自分。異端である自分と、人であった自分。

だからこそ、アルベルトゥスの視線は、ルドヴィクスにとっては、存在の否定にすら思えた。それは、あるいは弱さとも言えるものだったかもしれない。

「――貴方が何者でありましても、私の忠誠は……ルドヴィクス様のみに」

アルベルトゥスは、跪くと、そう言った。

その言葉に、ルドヴィクスは唇をかみ締めると、窓辺に歩み寄った。

「……俺は俺のやりたいようにする。気に食わなければ、好きにす

ればいい……。悪いが、今はお前の顔が見たくない。……下がっていろ。――これから俺の許可なしに、俺の周りをうろつくのを禁じる。俺からの指示があるまで、他の使用人を通してコンタクトをしろ」

ルドヴィクスは、激情をこらえるように、窓の外を必死に見ている。だから、ルドヴィクスは知らなかった。跪いたままのアルベルトゥスが、どれほど切なげな色をその美しい琥珀色の瞳に宿したか。

――そして、ルドヴィクスは知らなかった。自分の言葉が、どれほどこの美しい従者の心をえぐったのかを。

「……御意」

忠実にそう答える声だけは、どこまでも冷静を装っていたから。

「……なあ。レオ。俺は何なんだ……？　お前も知っているのか？」

アルベルトゥスが下がった後の私室で、ルドヴィクスは、ベッドに伏したまま、レオナルドゥスに話しかけていた。それに、レオナルドゥスは元気よく吼えて答える。ルドヴィクスには、その言葉が分かるわけではなかったが、何となく言っていることは分かる気がする。

「そうだな……。俺は、俺だ」

再び吼えるレオナルドゥスは、それを肯定してくれているように思えた。

「……お前は……優しいな。レオ……」

ルドヴィクスはそう言って、忠実に床の上に礼儀正しく座っていたレオナルドゥスを抱き上げる。

「――暖かい……」

ぬくもりが切ないほどになつかしくて、ルドヴィクスは、レオナルドゥスのつやつやとした毛並みをなでた。

外の気温は暑いはずなのに、不思議なほど熱が恋しかった。

ルドヴィクスは、レオナルドゥスを抱きしめたまま、目を閉じた。

「ジャスティーナ、何かいいことがあったのかい？」

ジャスティーナが家に帰るなり、母親にそう声をかけられた。

「うん」

それに、ジャスティーナは、元気よく頷いた。そして、少し迷いながら、口を開く。

「お母さん、あの……私、もしかしたら……『友達』ができたかもしれないの」

ジャスティーナはそう言いながら、首をかしげる。

今まで、ずっとこの瞳のせいで、ジャスティーナは仲間はずれにされ続けてきた。だからこそ、同年代の子と親しく会話をしたのですら、初めてのことだったのだ。

彼は、『また来る』と言ってくれた。だから、ジャスティーナは本当に嬉しかったのだ。

短い間だったけれど、ルイスと名乗った少年が真摯に話をしてくれたのは、感じ取っていた。

この忌まわしい瞳を美しいと言ってくれた信じられない言葉ですら、彼の瞳が真っ直ぐだったからこそ、本心からのものであると信じることができたのだった。そして、だからこそ、その言葉はジャスティーナにとって心の中の宝物のようだった。

「そうかい。良かったね。……それじゃあ、今日はジャスティーナにとっていい日なのかもしれないね。さっき、ヘスターさんが、この村に来ていたよ。おそらく、もうすぐこちらに来るんじゃないかね」

マーシャは、笑顔でそう言った。

「……デイヴィッドさんが？」

デイヴィッド・ヘスターは、自称「音楽家」だ。竪琴を手に、大きな街の街頭で歌を歌って生活をしているようだった。基本的に都市を回っているようだったが、出身地が近いとかで、1年に1度程度、この村の付近でも活動をしている。本人の言うところによると、

芸術家としてパトロンを探しているらしかったが、見つからないと嘆いていた。

そして、ジャスティーナはそのデイヴィッドのことを慕っていた。デイヴィッドは、ジャスティーナの瞳を気持ち悪がらない数少ない人間であり、またジャスティーナに珍しい歌を教えてくれる先生でもあった。

ジャスティーナにとって、デイヴィッドから、都の新しい流行歌や地方の民族歌などを教えてもらうことは何よりもの喜びだった。

スージーの店を出る際、多少の嫌なことはあったが、それ以前に素敵なリボンをプレゼントしてもらっていた。そして、初めて同年代の少年と親しく話すことが出来た。もしかしたら、友達になれるかもしれないと思うほどに。そして、1年に1度ほどしか会えないデイヴィッドがこちらにきているという。

たしかに、今日は自分にとっていい日だとジャスティーナはそう思った。

しばらくの間マーシャの手伝いなどをしつつ待っていると、家の呼び鈴が鳴らされた。

「……ヘスターさんかもね」

そういうマーシャに、ジャスティーナはにっこりと笑って返す。

「はい。どなた……ああ、ヘスターさん！　どうぞどうぞ」

マーシャはそう言ってもてなす。

そして、マーシャに通されたのは、長身だが細身の青年だ。淡い茶色の髪はさらさらで、青い瞳は上品だ。そして、身なりは清潔で好印象な青年。それが、デイヴィッドに対して抱く最初の印象だろう。顔立ちは柔和で、いかにも優しそうである。

それに、ジャスティーナは静かに会釈する。

「ご無沙汰しています。その後、どうでしたか」

「まあ、ぼちぼちとやっておりますよ……。ヘスターさんこそ、その後、どうですか」

マーシャの言葉に、デイヴィッドは苦笑する。

「……駄目ですね。全然。……僕には本当に才能がないんじゃないかと落ち込んでしまいますよ」

「そ、そんなことないです！」

デイヴィッドの返答に、思わずジャスティーナはそう言っていた。

マーシャと、デイヴィッドの視線が集まる。それに、ジャスティーナは思わず顔を赤くした。

「……そ、その……。私は……デイヴィッドさんの歌、好きです。竪琴も……」

視線にひるみながらも、ジャスティーナはそう言う。

「――ありがとう、嬉しいよ。ジャスティーナちゃん。それにしても驚いたなぁ、しばらく見ないうちに、綺麗になったね。もう、すっかり立派なレディだ」

デイヴィッドは優しく微笑みながらそう言う。

「そ、そんなことないです……！　私なんていまだに麦粥苦手で食べられないし、果実酒1杯で目を回しちゃうし、胸だってぺったんこで……あ」

慌てすぎて、言わずともいいことまで言ってしまったことに気づき、ジャスティーナは真っ赤になる。

そんな様子に、デイヴィッドはくすくすと笑っていた。

「相変わらず、元気だね。ジャスティーナちゃんのそういうところ、好きだよ」

「……からかわないで下さい」

「そんなつもりはないんだけどな」

「ヘスターさん。お茶をどうぞ。ジャスティーナも、はしゃぎすぎないのよ」

デイヴィッドが苦笑したところで、マーシャがお茶を持ってくる。

「……ありがとうございます、ハースさん。ご主人はお仕事ですか？」

「はい。朝から、薬草を取りに。いらっしゃると知っていれば、他の日にしたんですけどね」

「……いえ。こちらこそ突然すみません。それに、この村には、数日ほど滞在する予定なので。後日、またお伺いします」

「わざわざすみませんねえ」

「ご無沙汰していますし。……それに、私は色々な村や街の医者やまじない師の薬を知っていますが、ここのものが一番効きますね」

「もったいないことですわ」

デイヴィッドとマーシャは、和やかに会話をしていた。それを身ながら、ジャスティーナはマーシャが入れてくれたお茶を飲む。

デイヴィッドは控えめに微笑む青年だった。先ほど出会ったルイスが、印象的に笑う少年だったから、よりそう感じるのかもしれなかったが。デイヴィッドが微笑むたびに、淡い茶色の髪がさらさらと揺れる。青い目は上品で、全体的な細身のシルエットといい、清潔感があって育ちがよさそうな印象を受ける。顔立ちは整っている方だ。ルイスのような完璧な美貌と比べると見劣りするのは否めないが、デイヴィッドの容姿には、誰もが好感を抱くような清潔感と誠実そうな印象があった。かすかに香るのは、煙草の匂いだ。ジャスティーナの前では吸わないが、パイプを好んでいるらしい。といっても、臭いわけではない。少し変わった香りだが、いい香りだとジャスティーナは思っていた。

歳は、たしか２０代後半だったとジャスティーナは思う。

「……ところで、ジャスティーナちゃん。可愛いリボンだね。デートかな？」

突然、デイヴィッドがこちらを向いてそう言う。

「……へ？　いや、そんなのじゃありません！　これは、雑貨屋さんの好意でもらったから嬉しくて……デートするような相手もいませんし……」

「そうなのかい？　じゃあ、先ほどみかけた少年は、誰かな」

「え……み、見てたんですか！？」

もしかして、森の中でルイスと話していたところを見られたのかと、ジャスティーナは思わずそう言う。

「……図星か」

しかし、デイヴィッドは面白そうに笑いながら、そう言う。

「う、騙したんですか！？　――それに彼とはそういうのじゃないです……。会ったのだって今日が初めてだし……。たぶん、この付近の人じゃないと思うんです。きっと……上流階級の……住む世界が違う人です」

「――この村の住人じゃない……？　ちょっとどんな子か聞いてもいいかな。……ごめんね、最近物騒なことも多いから」

「心配することはないですよ。黒髪で、すごく綺麗で……育ちもよさそうですし。歳は……たぶん私よりも少し上かな。――話してた

ら、なんだか従者みたいな……銀髪の綺麗な男の人が来て、『外は危険だから迎えに来た』って」

ジャスティーナは、彼らのことをそう説明する。

「――ふぅん。なんだか、ミステリアスな感じだね。創作意欲が刺激されそうだ。1度会ってみたいな。その子に」

デイヴィッドは、にっこりと微笑みながら、ジャスティーナにそう言った。

5．ぬくもり（後書き）

主従関係にあるルドヴィクスとアルベルトゥスですが、仲が良好とは言いかねますね。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2688u/

異端の伝説

2011年11月3日19時13分発行